

ホーム > 企業情報・CSR情報 > CSR (企業の社会的責任)

CSR (企業の社会的責任)

ヤマハ発動機グループのCSRに対する取り組みについてご紹介します。

企業情報・CSR情報:

- ▶ 企業概要
- ▶ 企業理念
- ▶ 役員一覧
- ▶ 事業紹介
- ▶ ヤマハ発動機のモノ創り
- ▶ 沿革
- ▶ CSR (企業の社会的責任)
- ▶ IR情報
- ▶ 採用情報
- ▶ レース活動
- ▶ スポーツ活動
- ▶ コミュニケーションプラザ
- ▶ グループ企業
- ▶ 本社及び周辺案内図



▶ トップメッセージ
「モノ創りで輝き・存在感を発揮し続ける企業」を目指します

お知らせ

» 一覧へ

2010.11.22 グリーン調達ガイドライン (改訂版) を公開

2010.8.3 第2回 YAMAHA ASEAN CUP U-13 FOOTBALL 開催

2010.7.28 「GRIガイドライン対照表」を掲載

CSRの考え方とCSR基本方針

CSRレポート2010

(2009年1月~12月の活動についての年次報告と関連情報)

2009年活動クローズアップ

- » お客さま満足の向上
- » 新たなモビリティの追求
- » 事業を通じた社会貢献
- » 地域活性化プロジェクトへの協力

コーポレート・ガバナンス

- » リスクマネジメント/コンプライアンス
- » 倫理行動規範 (PDF)
- コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方や体制は、IR情報のページをご覧ください

お客さま

- » お客さまとともに
- » 製品開発とモノ創り
- » お客さま対応/サービス
- » 安全運転普及活動
- リコール関連情報はこちらをご覧ください

株主・投資家

- » 株主・投資家の皆さまとともに
- » 配当方針やディスクロージャーポリシーなどの情報はこちら

従業員

- » 従業員とともに
- » 多様性を活かした職場づくり
- » 人材育成/キャリア支援
- » 仕事と生活の両立支援
- » 職場の安全衛生

取引先

- » 取引先の皆さまとともに
- » グリーン調達/サプライヤーとのパートナーシップ

地域社会

- » 地域社会とともに
- » 社会貢献活動の事例
- » 従業員によるボランティア活動の事例

▶ CSR情報の開示について

▶ GRIガイドライン対照表

▶ 発行物ダウンロード

▶ アンケート

CSRレポート2010についてのアンケートにお答えください

地球環境

- » 地球環境とともに
- » 2009年の計画と実績
- » 資源循環や使用量削減の取り組み

- » 環境マネジメント
- » CO2排出量削減の取り組み
- » 環境負荷物質削減の取り組み
- » 生物多様性保全の取り組み
- » エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- » グループや各工場の環境データ

環境関連情報

- » グリーン調達ガイドライン、二輪車「3R」設計、リサイクルシステムなどはこちら

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団



[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

Copyright (C) Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved

トップメッセージ

CSRレポート2010の情報開示にあたっての経営トップからのメッセージです。

CSR（企業の社会的責任）:

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

TOP MESSAGE

「モノ創りで輝き・存在感を 発揮し続ける企業」を目指します



ヤマハ発動機株式会社
代表取締役社長 社長執行役員

柳弘之

新経営体制

ヤマハ発動機株式会社は、2010年3月25日付で新たな経営体制へ移行しました。私、柳弘之が代表取締役社長 社長執行役員に就任し、代表取締役専務執行役員の木村隆昭とともに経営陣一丸となってグループ経営の舵取りを行ってまいります。

ヤマハ発動機グループにとって2009年は、世界的な金融危機が実体経済へと波及する中、欧米市場における急速な需要の冷え込みや為替の円高傾向定着などの影響を大きく受け、既に発表しておりますとおり、これまでにない極めて厳しい業績となりました。

このような経営状況を一刻も早く改善するための具体的施策として「新中期経営計画（2010年～2012年）」を2010年2月に発表しました。この「新中期経営計画」は、「収益構造改革」「将来成長へ」という2つのフェーズから成ります。

構造改革

第Iフェーズ「収益構造改革」では、「生産体制の再編」など各事業の損益分岐点引き下げを目指した取組みを進めております。

この改革は、当社従業員はもとより、お取引先や地域社会をはじめ、当社を支えていただいている多くのステークホルダーの皆さまにさまざまな形で影響を及ぼすことは否めません。

経営としてはこうした事態に至ったことを将来への教訓として活かし、ヤマハ発動機がお客さまや

社会のニーズの変化に迅速・的確に適応できる企業に変革し、企業としての持続可能性を高めていくことが、中・長期的な視点でステークホルダーの皆さまからの信頼や期待に応え、社会的責任を果たすことにつながるものと確信しております。



成長戦略

一方、将来成長のための施策、第IIフェーズ「将来成長へ」は、長期ビジョン

Frontier2020の「パーソナルモビリティ」と「エンジン」に焦点化した4つの具体的施策を推し進めます。

(1) 「新興国への低価格二輪車の投入」

発展著しい中国・インドをはじめとする新興国市場へ低価格の二輪車を投入することで、より多くのお客さまの生活環境を向上させる機会を提供できるよう努めます。

(2) 「アセアン地域での二輪車の商品力・収益力向上」

二輪車の普及が進んだアセアン地域（タイ・インドネシア・ベトナム・フィリピン・マレーシア）では、CO2排出量削減にもつながる低燃費製品のラインナップの充実を図ります。

(3) 「次世代環境対応エンジンの開発」

当社の基軸事業で次世代環境対応エンジンの開発を進め、二輪車エンジンについては2012年までに30%、2015年には50%の燃費向上（共に2008年比）と、船外機については2015年までに30%の燃費向上（2007年比）に取り組みます。

(4) 「スマートパワー※の技術開発と製品の市場導入」

より環境負荷が小さい、電気を動力源とするパーソナルモビリティ製品（電動二輪車・電動アシスト自転車）の普及と事業拡大に取り組みます。電動二輪車については既に開発を進めており、2010年秋に予定している新製品の市場導入を皮切りに中長期での普及拡大を目指します。一方、日本のみならず欧州においても成長著しい電動アシスト自転車については、パイオニアとしてプレゼンスのさらなる強化を図ります。

ヤマハ発動機グループは今後も「モノ創りで輝き・存在感を発揮し続ける企業」を目指し、パーソナルモビリティを基軸とした事業を通じて、CSR「企業の社会的責任」を果たしていきたいと考えております。

最後に、本レポートをご覧いただくことを通して、ステークホルダーの皆さまとのより良い信頼関係を築いていけることを願うとともに、本レポートに対する忌憚のないご意見をお聞かせいただけましたら幸いです。皆さまの変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

※スマートパワー＝電動車両を基軸とする新しいモビリティを追求した新動力源

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) | [電動バイク](#) | [電動自転車](#) | [マリン製品](#) | [製品一覧](#) | [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) | [ラグビー情報](#) | [ペーパークラフト](#) | [グループリンク](#) | [部品情報検索](#) | [リコール情報](#) | [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

2009年活動クローズアップ

2009年のCSR活動における代表的な取り組み事例をご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）:

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

Closeup1 お客さま満足の向上

成長が続くアセアン地域で さまざまな人々の移動を支える二輪車



Closeup1

お客さま満足の向上

Closeup2

新たなモビリティの追求

Closeup3

事業を通じた社会貢献

Closeup4

地域活性化プロジェクトへの協力

アセアン特有の生活環境で支持されている二輪車

近年アセアン地域では急速に経済発展が進んでいます。しかしながら都市部を離れるとまだまだ未舗装道路も多く、雨季には熱帯特有のスコールによって道路が冠水してしまうことも少なくありません。こうした地域特有の生活環境により、道路が冠水した状態でも走行できるように大径タイヤを装備しながら、乗り降りのしやすさについても考慮された車体形状をもつモペット型二輪車^{※1}が市場の約6割を占めています。また、アセアン地域の一般家庭では1台の二輪車を家族全員で共用することも多く、耐久性や経済性にも優れたモペット型二輪車は、生活に密着した移動手段として広く支持されています。

期待に応え、熟成が進む「Mio（ミオ）」

経済発展にともなってアセアン地域においても女性の社会進出が進み、二輪車に乗る女性は増加傾向にあります。しかし、体格が小柄で車体サイズに合わず、乗り降りに際し足を上げることや、跨る姿勢をとる乗車ポジションのためにモペット型を自分の移動手段にすることに抵抗を感じるお客さまも少なくありません。

2003年にタイ・インドネシア・マレーシア・ベトナムの4ヶ国で発売した「Mio（ミオ）」は、より女性が乗りやすいコンパクトでスリムな車体、跨る動作が不要で足先が揃えられる乗車ポジション、操作が簡単なオートマチックといった点が評価され、多くの女性から支持されています

（2009年の販売台数は約156万台、累計では約490万台）。お客さまからの期待や要望をもとに



「Mio」は通勤などで二輪車に乗る女性から多くの支持を得ている

熟成を年々重ねながら、さまざまなバリエーションの追加やアフターサービスの充実にも取り組んできたことなどが評価され、2009年にはインドネシアで「Best Brand Award 2009」を受賞することができました。

■ お客さまのニーズを捉えた次世代製品の開発

通勤通学や荷物の運搬、家族との外出など、さまざまな移動の手段として二輪車が使われることはアセアン各国で共通ですが、それぞれの国や地域がもつ文化、都市や地方といった生活環境によって期待や嗜好の違いがあります。お客さまのニーズをよりの確に捉えるための各国でのさまざまな市場調査などを通じて、二輪車をファッションアイテムの一つとして捉える若者の増加や、モペット型のオートマチック製品を望む声が多い、という分析結果が出ていました。

2009年11月にベトナム市場に導入した

「LEXAM（レグザム）」の開発目標は、そうしたお客さまからの要望に応えると同時に、環境性能（低燃費）や耐久性も向上させて、お客さま満足度をさらに高めることにありました。その鍵となったものが「LEXAM」で初めて採用された新開発の小型CVT（自動無段変速機構）で、従来のCVTに対し画期的ともいえるコンパクト化を実現しています。快適性、デザイン性、耐久性、燃費などの点でモペット型二輪車の新ジャンルと呼ぶにふさわしい製品となった「LEXAM」。その実現に重要な役割を担ったコンパクトなCVTユニット

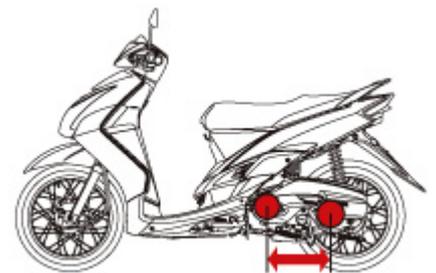
「Y.C.A.T.^{※2}」は、アセアン地域のモペット型二輪車に今後順次採用されていく予定です。

※1 モペット型二輪車＝乗り降りしやすいようにメインフレームを下側へ湾曲させ大径タイヤ（前後17インチ等）を装着した小型二輪車

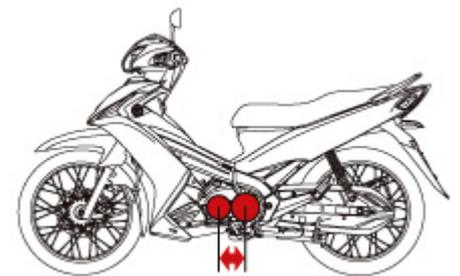
※2 Y.C.A.T.＝Yamaha Compact Automatic Transmission



2009年にベトナム市場に導入した新製品「LEXAM（レグザム）」



従来のCVTは前後に長く、大径タイヤを装着するモペット型二輪車には適していない



新開発された「Y.C.A.T.」のコンパクトさは、重量バランスの最適化の点でもメリットがある

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

ホーム > 企業情報・CSR情報 > CSR（企業の社会的責任） > 2009年活動クローズアップ

2009年活動クローズアップ

2009年のCSR活動における代表的な取り組み事例をご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）:

- ▶ トップメッセージ
- ▶ CSR関連のお知らせ
- ▶ 2009年活動クローズアップ
- ▶ CSRの考え方
- ▶ コーポレート・ガバナンス
- ▶ お客さま
- ▶ 株主・投資家
- ▶ 従業員
- ▶ 取引先
- ▶ 地域社会
- ▶ 地球環境
- ▶ CSR情報の開示について
- ▶ GRIガイドライン対照表
- ▶ 発行物ダウンロード

関連リンク:

- ▶ CSRレポート2010についてのアンケート

Closeup2 新たなモビリティの追求



事業を通じた環境への取り組み

Closeup1
お客さま満足の向上

Closeup2
新たなモビリティ
の追求

Closeup3
事業を通じた
社会貢献

Closeup4
地域活性化
プロジェクトへの協力

■ 新動力源「スマートパワー※」の研究開発

近年、地球温暖化をはじめとする環境・エネルギー問題への対応がグローバルな共通課題となっています。ヤマハ発動機では、モビリティに関わるメーカーとして事業を通じてこれらの課題に取り組む、持続可能な社会の実現のために「パーソナルモビリティ」の進化が果たす役割は大きいと考えています。当社では、大幅な低燃費化を目指した次世代環境対応エンジンの開発を行うとともに、新しいモビリティを追求した新動力源「スマートパワー」の技術研究や製品の開発を進めています。



2009年秋の東京モーターショーに参考出品した「EC-f」

※スマートパワー＝電動車両を基軸とする新しいモビリティを追求した新動力源

■ 中長期を見据えた「電動二輪車」の開発

スマートパワーの基軸である電動二輪車については、これまでも開発・市場投入をしてきました。2009年秋の東京モーターショーでは2010年秋の市販に向けた参考モデルを出品しました。開発中の電動二輪車「EC-03」（イーシーゼロスリー）は、「ライト・スマート・クリーン&サイレント」をコンセプトにした、バッテリーからの電気だけで走行する二輪車です。薄型の電動パワーユニットとリチウムイオンバッテリーを軽量



2009年秋の東京モーターショーに参考出品した「EC-03」

アルミフレームに搭載し、独自の制御技術による滑らかでスムーズな発進・加速を特徴とし、家庭用コンセントから差し込みプラグを使って直接バッテリーに充電できるプラグイン方式を採用しています。ヤマハ発動機では、「スマートパワー」関連技術の研究と開発を進めながら、中長期を見据えた電動二輪車の製品開発、普及に今後も取り組んでいきます。

モビリティの変化に応える「電動アシスト自転車」

ヤマハ発動機が「世界新商品」として1993年に発売した電動アシスト自転車「PAS」の開発の背景には、1980年代からすでに表面化していた、省エネルギーをはじめとする「地球環境問題」や少子高齢化という「社会的な問題」に対するモビリティに関わるメーカーとしての課題認識がありました。

当初のお客さまはシニア層や子供をもつ主婦層が中心でしたが、電動アシスト自転車の便利さ、健康志向や環境意識の高まりなどで、近年では学生の通学や都市部の通勤、さらに官庁や自治体、企業による営業や宅配業務での使用へ次第に拡がり、2008年の総需要は31万5000台と、2000年と比較して約2倍の伸びとなっています。

また、日本と同様に自転車が社会に深く浸透している欧州においても、ここ数年、電動アシスト自転車の普及は年率50%という急激な伸長となっており、市場環境に対応した製品の導入を進めています。



スポーティな走行性能やスタイルが人気の「PAS Brace L」



幼児2人同乗基準に適合した「PASリトルモアリチウム」

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) | [電動バイク](#) | [電動自転車](#) | [マリン製品](#) | [製品一覧](#) | [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) | [ラグビー情報](#) | [ペーパークラフト](#) | [グループリンク](#) | [部品情報検索](#) | [リコール情報](#) | [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問い合わせ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

2009年活動クローズアップ

2009年のCSR活動における代表的な取り組み事例をご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）:

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

Closeup3 事業を通じた社会貢献



Closeup1
お客さま満足の向上

Closeup2
新たなモビリティ
の追求

Closeup3
事業を通じた
社会貢献

Closeup4
地域活性化
プロジェクトへの協力

■ お客さまの数だけ存在する「動くこと」

日本社会が高度成長の時期を過ぎ、量よりも質で生活の豊かさを考える人たちが増え始めた90年代初頭、ヤマハ発動機の電動車イス事業は、「モノ創りによって社会に貢献」という思いをもったエンジニアの集まりによる新規事業として始まりました。

当社が開発に着手した当時、車イスを必要とする人の障がいのレベル・症例は多岐にわたるにもかかわらず、手動の車イスが大きくて重量もかさむオーダーメイドの電動車イスという2つの選択肢しかありませんでした。手動では自分で思うように動けない、電動では生活環境や体の状態に合うものがない、という状況に置かれた人たちは「動くこと」から遠ざかってしまっていたのです。

■ 一人ひとりの生活が製品開発の基点

ヤマハ発動機の電動車イス事業における最初の製品となった「電動化ユニット」の誕生のきっかけは、エンジニアが試行錯誤の末に辿り着いた発想の転換にありました。電動車イスの全てを自分たちで開発しようとする限り、結局は一人ひとりの条件にあわせたオーダーメイドになっていってしまい、電動のメリットを得られる人を増やすことにはならない。それよりも既にお客さまが使用しているさまざまな手動車イスを電動化するユニットだけに絞って開発するほうが、より多くの人に「動くこと」を提供することができるのではないか、というものでした。

電動化ユニットの製品化で可能となった、手動の軽快さを保ちながら電動による行動の自由も得られる、という新たな選択肢は画期的でしたが、より多くのお客さまの要望に応え



電動化ユニット装着イメージ

るうえでは一つのステップに過ぎません。人が起きてから床につくまで、生きていくために必要な行動のほとんどに「動くこと」が関わっています。また、お客さまの症例や感覚が異なれば、ユニットへの操作入力と車輪へのモーター出力の設定という技術的な要件も異なってきます。車イス電動化ユニットは量産品でありながら、エンジニアが実際にお客さまのもとに足を運び、一人ひとりの1日、生活そのものを知って感じたことを基点に、何がお客さまの価値となるのかを考え抜いた結果を1台1台に付加してお渡しする製品なのです。

■ さらに多くの人の「動くこと」を実現する取り組み

車イスの電動化のメリットは、障がいをもつ人の「動くこと」への物理的なバリアーを減らせることだけでなく、「誰かの助けを必要とすること」への心理的なバリアーも減らせることにあります。それは介助する人への身体的・心理的な負荷を減らすことにもつながっており、電動化は「動くこと」をアシストする一方で、障がいによる心の閉塞を解くことにもつながっています。

当社では、より多くの車イスのお客さまに電動化のメリットを提供できるように、製品ラインナップ

の拡充に取り組んでいます。2009年10月にはリクライニングタイプやチルトタイプ等の車イスへの対応や扱いやすさを向上させた電動化ユニット「ジョイユニットエクス」を発売しました。さらに多くの人の「動くこと」を実現するために、顎だけは動かすことができる人や、足であれば操作をおこなえる人の要望に応える取り組みも始まっています。



2009年10月に発売した電動化ユニット「ジョイユニットエクス」

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

[ホーム](#) > [企業情報・CSR情報](#) > [CSR（企業の社会的責任）](#) > [2009年活動クローズアップ](#)

2009年活動クローズアップ

2009年のCSR活動における代表的な取り組み事例をご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）:

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

Closeup4 地域活性化プロジェクトへの協力

電動アシスト自転車PASの可能性を活かし 観光地や街を活性化



Closeup1

お客さま満足の向上

Closeup2

新たなモビリティの追求

Closeup3

事業を通じた社会貢献

Closeup4

地域活性化プロジェクトへの協力

■ 電動アシスト自転車の普及による可能性

自転車の手軽さや利便性というメリットを活かしながら、自転車の基本的な弱点である坂道や向かい風、荷物積載時にかかる負荷を電動モーターでペダルを踏み込む力を補助することで減らし、快適な走行を可能にする電動アシスト自転車。ヤマハ発動機が1993年に「世界新商品」として開発、販売を開始した「地球に優しく、人に優しいパーソナルコミューター」の普及が急速に進んでいます。

普及当初は、「電気の力」がペダルを踏む「人の力」をアシストすることで実現する快適性・利便性に魅力を感じて購入されるお客さまが中心でしたが、より身近な乗り物となってきたことで、効果的な有酸素運動が可能で健康維持につながることで、環境への負荷軽減効果もあることへの認知も進んできています。電動アシストに関する新基準（2008年に法令改正）に対応した2009年発売の製品は、より快適に乗れるようになったこともあり、電動アシスト自転車を単に移動に便利な手段としてではなく、通勤やこれまでになかった街の楽しみ方を可能にする乗り物と捉える人が増えてきているのです。

■ 観光地や街の活性化プロジェクトへの協力

交通手段の変化や商業施設の郊外立地が進んだことなどの影響で、日本の各地で中心市街地の空洞化が進み、観光に訪れる際の人々の価値判断や行動パターンに関しても構造的な変化が見られるようになってきています。観光資源をより有効に活用した魅力的な街づくりを実現するためには、施設面での整備とともに訪れる人たちの嗜好の変化に応える移動手段の充実も課題となっていることが多く、自治体や観光協会などの団体による電動アシスト自転車のレンタル事業をともなった地域活性



「パーク&ライド」のモニター実験を実施した熱海市地域活性化プロジェクトの皆さん

化の取り組みが各地で実施されています。
日本有数の観光地である静岡県熱海市でも官民協同の地域活性化プロジェクトが進行しており、2009年10月には市街地と海岸部を中心に点在する観光ポイントを電動アシスト自転車やボートによって結ぶ社会実験が実施され、ヤマハ発動機は電動アシスト自転車の車両提供による協力を行いました。熱海市は海と山が隣接した温泉観光地で、坂道が多いことや主要幹線道路への交通集中による渋滞が観光客の移動を制約していると考えられており、車を停めてボートで海からの熱海を楽しむ「パーク&クルーズ」、さらに電動アシスト自転車で観光客の周遊エリアを拡げる「パーク&ライド」等の実現にむけた拠点やルート設定などについての検証が行われ、4日間で計167名の観光客や地域住民から意見を収集することができました。



南熱海地区の急勾配が続く「妙楽湯」コースを試走

街づくりでのニーズに応え事業面でも実現をサポート

ヤマハ発動機販売では、各地からのニーズを受けて車両メンテナンスや各種保険をパッケージにした電動アシスト自転車PAS（パス）の官公庁・法人向けリースシステム「パスクル」を2009年に導入しています。地形や観光資源という点で熱海と共通点の多い長崎県平戸市でも、自家用車で訪れる観光客を対象に無料で電動アシスト自転車・ハイブリッド自動車を貸し出す社会実験が国土交通省の委託を受けて2009年10月～12月に実施され、実験終了後も観光協会や宿泊事業者によるレンタル用PASの観光客への貸し出しが行われています。

富士河口湖町（山梨県）や美濃市（岐阜県）では2010年春の導入に向けた準備が進むなど、各地で電動アシスト自転車の可能性に着目した地域活性化の取り組みが進んでおり、ヤマハ発動機グループでは「魅力的な街づくり」実現にむけた事業面でのサポートにも取り組んでいます。

電動アシスト自転車の官公庁・法人向けリースシステム「パスクル」の情報はこちら
<http://www.ymsj.jp/business/lease/>（ヤマハ発動機販売）

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

CSRの考え方

ヤマハ発動機グループのCSRについての考え方やその基となる理念体系についてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク：

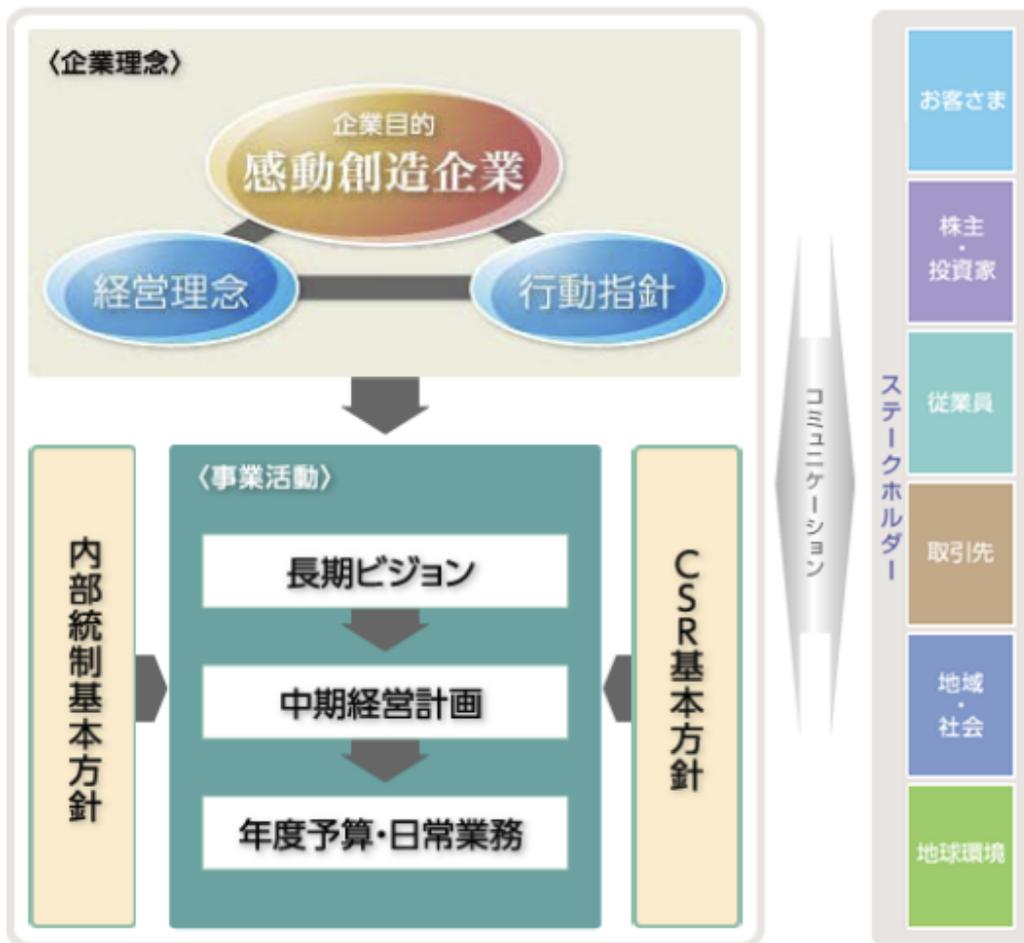
- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

CSRの考え方

事業活動を通じて 社会の持続可能な発展に貢献します

ヤマハ発動機では創業以来、「社訓」に“企業活動を通じた国家社会への貢献”を謳い、この精神に基づいた従業員一人ひとりの行動を通して社会に貢献することを掲げています。そして、「感動創造企業：世界の人々に新たな感動と豊かな生活を提供する」ことを企業目的として、「モノ創り」を通じて多様な価値の創造に努めてきました。また、経営理念においては「顧客の期待を超える価値の創造」、「仕事をする自分に誇りが持てる企業風土の実現」、「社会的責任のグローバルな遂行」というお客さま・従業員・社会に対する経営の基本姿勢を示しており、企業目的と経営理念、さらに実践における行動指針の3点をもってヤマハ発動機グループの企業理念としています。

ヤマハ発動機グループでは、ステークホルダーへの主な社会的責任をCSR基本方針としてまとめており、企業理念に基づく事業活動を通じて社会の持続可能な発展に貢献することが、私たちに期待されているCSR（企業の社会的責任）と考えています。



➤ [CSRの考え方](#)

➤ [CSR基本方針](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

Copyright (C) Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved

CSR基本方針

ヤマハ発動機グループのCSRに関する基本方針をご紹介します。

CSRの考え方:

▶ CSR基本方針

CSRの考え方

CSR基本方針

ヤマハ発動機グループは、社会からより信頼される企業として、国内外の法令ならびにその精神を遵守するとともに、ステークホルダーの皆さまとのコミュニケーションを大切に、企業理念に基づく事業活動を通じて、社会の持続可能な発展に貢献します。取引先においても、この方針の趣旨を支持し、それに基づいて行動することを期待します。

<p>お客さま</p>	<ul style="list-style-type: none"> 安全で高品質かつ革新的な製品とサービスを通じて、世界の人々に新たな感動と豊かな生活を提供します。 製品に関する有益な情報を分かりやすく提供します。 お客さまをはじめ事業活動にかかわる人々の個人情報保護の徹底に努めます。
<p>株主・投資家</p>	<ul style="list-style-type: none"> 長期安定的な成長を通じた企業価値の向上をめざします。 事業・財務状況と成果の適時かつ適正な開示を行います。
<p>従業員</p>	<ul style="list-style-type: none"> 均等な雇用機会を提供し、従業員の多様性を認め、差別を行いません。 公正な労働条件を提供し、安全かつ健康的な労働環境を維持・向上するよう努めます。 人権を尊重し、いかなる形であれ児童労働・強制労働は行いません。 従業員と会社が、相互信頼に基づき、誠実な対話と協議を行い、お互いに繁栄するよう努力します。
<p>取引先</p>	<ul style="list-style-type: none"> 調達先や販売店などの取引先を尊重し、相互信頼に基づき、長期的視野にたって相互繁栄の実現に取り組みます。 調達先の決定にあたっては、国籍や規模にかかわらず広く世界に門戸を開き、総合的な評価に基づき判断します。 各国・地域の競争法を遵守し、公正な取引を維持します。
<p>地域・社会</p>	<ul style="list-style-type: none"> 各国の文化・慣習を尊重し、企業市民として社会との調和に努めます。 納税、雇用創出、モビリティ創出などを通じて、健全な地域社会の発展に貢献します。 人材育成、環境保全、交通安全普及など社会貢献活動を推進し、また従業員の自主的な活動を支援します。 行政府諸機関との健全かつ公正な関係を維持します。
<p>地球環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> 環境技術の開発を進め、環境と経済が両立した製品の実現をめざします。 限りある資源を大切に、事業活動による環境負荷の最小化に努めます。 幅広く社会と連携・協力し、環境保全活動に取り組みます。

[▶ CSR の考え方](#)

[▶ CSR 基本方針](#)

[CSR トップページ](#) | [CSR の考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR 情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

Copyright (C) Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved

ホーム > 企業情報・CSR情報 > CSR（企業の社会的責任） > コーポレート・ガバナンス

コーポレート・ガバナンス

ヤマハ発動機グループのコーポレート・ガバナンスについてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）:

- ▶ トップメッセージ
- ▶ CSR関連のお知らせ
- ▶ 2009年活動クローズアップ
- ▶ CSRの考え方
- ▶ コーポレート・ガバナンス
- ▶ お客さま
- ▶ 株主・投資家
- ▶ 従業員
- ▶ 取引先
- ▶ 地域社会
- ▶ 地球環境
- ▶ CSR情報の開示について
- ▶ GRIガイドライン対照表
- ▶ 発行物ダウンロード

関連リンク:

- ▶ CSRレポート2010についてのアンケート

コーポレート・ガバナンス

社会から信頼され 模範となる企業をめざして

ヤマハ発動機グループでは、コーポレート・ガバナンスの強化を図るとともに、コンプライアンスとリスクマネジメントをCSRの最優先課題として位置付け、統合的な推進や、内部統制視点からの強化を図るために、社長執行役員を委員長とし、役付執行役員全員および社外有識者から構成する「リスク・コンプライアンス委員会」を設置するなど、グループ全体でCSRに取り組む体制を整備しています。

リスク・コンプライアンス委員会は、ヤマハ発動機グループの抱えるリスクの統合的な管理を推進する役割を担い、リスクの洗い出しと評価に基づき選定した重要リスクの担当部門を決定し、リスク発生の未然防止から発生後の対応までの取り組みを行い、推進状況をモニタリングします。

▶ コーポレート・ガバナンス

▶ リスクマネジメント／コンプライアンス

▶ コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方や体制は、IR情報のページをご覧ください

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)

[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)



ホーム > 企業情報・CSR情報 > CSR（企業の社会的責任） > コーポレート・ガバナンス > リスクマネジメント／コンプライアンス

リスクマネジメント／コンプライアンス

リスク対応やコンプライアンスに関する取り組みをご紹介します。

コーポレート・ガバナンス:

▶ リスクマネジメント／コンプライアンス

コーポレート・ガバナンス

リスクマネジメント／コンプライアンス

リスクマネジメントの取り組み

ヤマハ発動機グループでは、グループ全体のリスクマネジメントに関わる体制構築と確実な管理を推進し、重要なリスクの未然防止を図っています。グループ共通の管理手法としてのRMS（リスクマネジメントシステム）と緊急時対応（危機管理）マニュアルに基づき、コンプライアンスに関わる不祥事や災害、事故などに由来するリスクの未然防止と早期発見、さらに発現時の迅速・的確な対応に努めるとともに、部門やグループ各社でのリスク管理の継続的な改善やグループ全体での統合的なリスクマネジメントに取り組んでいます。

グループ会社への展開としては、2009年12月時点でヤマハ発動機および国内外グループ会社113社でリスクマネジメントシステムの導入を終え、運用を開始しています。今後はより事業と一体となったリスクの適正管理をめざしていきます。

新型インフルエンザ（H1N1）への対応

2009年4月に発生が確認され、世界的に流行した新型インフルエンザについては、予め定めた方針と手順に基づき、5月17日に社長を本部長とする緊急対策本部を設置、未然予防措置、感染者の有無の確認、健康推進センターとの情報連携など、社内での感染防止策の具体的な指示と徹底を図りました。

1 2 3

[次のページへ](#) »

[▶ コーポレート・ガバナンス](#)

[▶ リスクマネジメント／コンプライアンス](#)

[▶ コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方や体制は、IR情報のページをご覧ください](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) | [電動バイク](#) | [電動自転車](#) | [マリン製品](#) | [製品一覧](#) | [企業情報・CSR情報](#)

[レース情報](#) | [ラグビー情報](#) | [ペーパークラフト](#) | [グループリンク](#) | [部品情報検索](#) | [リコール情報](#) | [ニュースリリース](#)

リスクマネジメント／コンプライアンス

リスク対応やコンプライアンスに関する取り組みをご紹介します。

コーポレート・ガバナンス:

▶ [リスクマネジメント／コンプライアンス](#)

コーポレート・ガバナンス

リスクマネジメント／コンプライアンス

コンプライアンスの徹底

ヤマハ発動機グループでは、社会から信頼され模範となる企業をめざし、年間計画に基づいたコンプライアンス活動を継続的に展開しています。社訓や経営理念を踏まえて社員一人ひとりが遵守すべき行動基準を定めた「倫理行動規範」の周知徹底を図るとともに、業務における実践を促しています。

「倫理行動規範」については、2008年に社内外の動向や要請を反映した大幅な改訂を行っており、それをもとにした国内グループ会社での制定を経て、海外グループ会社でその国や地域の実情を踏まえた「倫理行動規範」の策定を進めています。（2009年末の時点では12ヶ国で完了）

教育・研修ツールを充実

ヤマハ発動機と国内グループ会社では、倫理行動規範への理解を深め日常的な実践を促進するために、身近なコンプライアンス事例をQ&A方式で記載したマニュアルを作成しています。2009年3月には、社員意識調査などを通じて職場から寄せられたさまざまな事例や、法令の変更を踏まえた改訂を行い、社内のイントラネットへの掲載も実施しています。

また、近年急速に進んだ事業のグローバル化に対応して、海外商取引における公務員との関係を適正に保つうえで、必要とされる知識を整理して分かりやすくまとめた教育ツールを作成し、周知徹底に取り組んでいます。

階層別・部門別研修

ヤマハ発動機では、倫理行動規範や業務に関連する法令の理解促進を目的に、役職員を対象とした教育・研修を、階層別、部門別に開催しています。

階層別研修では、社内外のリスク事例を活用した「春期研修」と、応用性を考慮したケースメソッドを通じ倫理観を共有化する「秋期研修」を実施しました。また、受講した基幹職が各職場で実施する「職場研修会」の2009年の出席者数は延べ22,229名となっています。

部門別研修については、業務に関わる法令の理解や、社会環境を踏まえて注視すべき法令の基本的な知識の習得、社会の変化・要請への「感度」を養うことを目的に各法令の主管部門が開催しています。2009年は延べ11,934名が出席、イントラを



使って各自で行うEラーニング研修については延べ22,998名が受講しました。



秋期コンプライアンス研修

意識調査

ヤマハ発動機では、従業員による倫理行動規範の遵守状況、遵守の基盤となる職場環境、社会的関心の高いコンプライアンス項目についての実態や意識を確認し、今後のコンプライアンス活動に活用することを目的に意識調査を実施しています。（2009年は10月に実施）

« 前のページへ

1 2 3

次のページへ »

- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [リスクマネジメント／コンプライアンス](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方や体制は、IR情報のページをご覧ください](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

リスクマネジメント／コンプライアンス

リスク対応やコンプライアンスに関する取り組みをご紹介します。

コーポレート・ガバナンス:

▶ [リスクマネジメント／コンプライアンス](#)

コーポレート・ガバナンス

リスクマネジメント／コンプライアンス

コミュニケーションの活性化「1万人の対話作戦」

ヤマハ発動機では、職場での健全で活発なコミュニケーションが風通しの良い組織をつくり、コンプライアンスを遵守する企業風土の基盤となると考えています。全社的に取り組んできた倫理行動規範の周知活動やリスクマネジメントの取り組みに加え、職場でのコミュニケーションを見直すと同時に活性化、チームワーク強化につなげるための運動として「1万人の対話作戦」をスタートしました。具体的な活動としては、上司部下間や同僚間で“ざっくばらん”に相談ができ、協力し合う雰囲気づくりの機会として「ひと声運動」、対話を促進する「カジュアルトークデー」を各職場で開催しています。



カジュアルトークの様子

内部通報制度（ホットライン）の周知徹底

ヤマハ発動機では、「倫理行動規範」に違反する行為に気付いた場合の通報や、コンプライアンス全般に関する相談・問合せを従業員各自が直接行うことができるように「コンプライアンスホットライン」と「ハラスメントホットライン」を設置、また国内グループ会社を対象に「コンプライアンスグループホットライン」を設置して、違法行為や不正行為の早期発見と未然防止の徹底を図っています。

2009年の取り組みとしては、コンプライアンス強化月間とした10月に「コンプライアンスセルフチェックカード」の配布やホットラインの周知活動を行いました。また、倫理行動規範の周知徹底や教育研修の継続的な実施によって職場での“気付き”が増えつつあり、事前相談や問合せの件数も増加傾向にあります。

安全保障貿易管理

ヤマハ発動機では、「外国為替及び外国貿易法」などの関連法規の遵守を基本とした、リスク管理の面でも実効性の高い安全保障貿易管理に取り組んでいます。2009年には内部監査と社内教育の一層の充実とともに、社員一人ひとりが常に意識的に行動する企業風土づくりと貿易管理におけるPDCAサイクルの定着に努めました。

また、2009年5月には名古屋税関から「特定輸出者」の認定を受け、工場バンニング等を再開することができました。この認定の重さを忘れることなく、グローバル企業としての社会的責任を果たすとともに「社会から信頼され、模範となる企業」をめざした、貿易管理体制の整備と強化に引き続き取り組んでいきます。

- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [リスクマネジメント／コンプライアンス](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方や体制は、IR情報のページをご覧ください](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

お客さま

お客さまへの取り組み姿勢や方針についてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）:

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

お客さま

お客さまの期待を超える価値を提供

ヤマハ発動機グループの企業目的「世界の人々に新たな感動と豊かな生活を提供する」の実現にあたっては、何よりもまず、「製品」が大きな役割を担っています。お客さまとの関係における基盤として確かな品質があり、そのうえで製品開発、モノ創り、サービスの向上を通じて絶えず変化する社会の要請やお客さまの期待を超える価値を提供することが、感動や豊かさの体験へとつながっていくと私たちは考えています。

ヤマハ発動機グループの製品の多くはモビリティ（＝人やモノの移動）に関わるものです。乗ること自体を楽しむといった趣味の領域から、通勤通学や荷物の運搬といった生活に欠かせない道具としての領域まで、お客さまの用途は多岐にわたり、国や地域によって求められる対応が異なっている場合も多いのですが、いずれにしても「お客さま基点での判断」が最優先されることに違いはありません。

その判断に際し不可欠かつ貴重な情報源となっているものが、販売店やお客様相談室などを通じて届く、お客さまからの評価や要望なのです。私たちはそれらを最大限に活用し、製品の企画段階からサービスに至るまで、「お客さま基点」での検証・改善による提供価値の向上に取り組んでいます。

ヤマハ発動機グループは、お客さまの期待に応えることに近道も終わりもなく、常に全社員がお客さま基点に立ち、各自の役割において努力し続けなければならないと考えています。グローバル経済が大きく変動する状況下にあっても、常に地道で継続的な取り組みを怠ることなく、満足度の高い製品を今後もお客さまにお届けできるように努めていきます。

ヤマハ発動機グループの品質基本方針

ヤマハブランド憲章の精神に則り、豊かな『感性』を尊重し、お客様基点に立ち、高品質主義、即ち選りすぐられた製品を効果的に具現化するために最良品質を指向し最適水準の創出により確かな製品安全性・信頼性を実現し製品を通じて常にお客様に安心と信頼、そして感動を提供する。

- ▶ [お客さまとともに](#)
- ▶ [製品開発とモノ創り](#)
- ▶ [お客さま対応／サービス](#)
- ▶ [安全運転普及活動](#)

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

[ホーム](#) > [企業情報・CSR情報](#) > [CSR（企業の社会的責任）](#) > [お客さま](#) > [製品開発とモノ創り](#)

製品開発とモノ創り

2009年の製品開発や生産における取り組みをご紹介します。

お客さま:

- ▶ 製品開発とモノ創り
- ▶ お客さま対応／サービス
- ▶ 安全運転普及活動

お客さま

製品開発とモノ創り

2010年秋の市販に向け「エレクトリック・コミューター」を開発

走行時のCO2排出がゼロであること、化石燃料への依存軽減につながる可能性があることから、電動車両の本格的な普及に対する期待はグローバルレベルで高まってきています。ヤマハ発動機では2010年秋の市販に向け、充電式バッテリーとモーターで走行する「エレクトリック・コミューター」の開発を進めています。

2009年10月23日から11月4日まで開催された東京モーターショーには、今後の可能性を示したモデルとともに開発中のエレクトリック・コミューターをベースにした車両を参考出品しました。

環境問題への社会的な関心が高まり、環境に配慮

した製品を選ぶお客さまが増えています。そうしたお客さまからの期待に応えるために、当社では、これまでもエレクトリック・コミューターの開発・市場投入をしてきました。住居や外出先での充電インフラ、日本国内や各国の制度・規制をはじめとする、社会全体のさまざまな環境整備の進行を考慮しながら、来たる電動車両の本格的な普及期に必要な技術開発や事業基盤構築を進めており、今後も中長期でのモビリティのあるべき姿を見据えた取り組みを進めていきます。



「EC-03」（2009年秋の東京モーターショーや2010年春の東京・大阪モーターサイクルショーに参考出品）

「燃料電池」や「ハイブリッド」技術の研究開発

ヤマハ発動機では、今後の二輪車の動力源に関するさまざまな可能性を探ることを目的として、燃料電池（圧縮水素型、直接メタノール型の2種類）や内燃機関とモーターのハイブリッド技術の研究開発についても取り組んでいます。



2009年秋の東京モーターショーで展示した「FC発電機」と「HV-X」

幼児2人同乗基準に適合した電動アシスト自転車PASを発売

電動アシスト自転車の便利さが認知され、健康志向や環境意識の高まりもあって、電動アシスト自転車のお客さまは、従来の子供をもつ主婦層やシニア層に加え、通学・通勤での使用や、官庁・自治体・企業による業務使用へと広がってきています。

このような需要拡大が自転車とともに過去数年にわたって続かなかで、買い物や幼稚園・保育園への送迎などで子供を2人同乗させた使用が主に都市部で増加し、その安全性についての議論が高まってきました。2008年12月に「電動アシスト自転車のアシスト比率に関する法令基準の改正」が施行されたことに加えて、2009年4月には警察庁によって幼児2人同乗用自転車についての導入見通しが発表されました。ヤマハ発動機では、それを受けて（社）自転車協会が制定した幼児2人同乗用自転車に関する安全基準を満たした製品の開発を進め、2009年7月に実施された各都道府県での道路交通規制の一部改正にあわせて「PASリトルモアリチウム」を発売しました。



幼児2人同乗基準に適合した「PASリトルモアリチウム」



（社）自転車協会の安全基準に適合した製品に付けられるBAAマーク

世界各地のお客さまに同品質のモノ創りを提供するために

近年のグローバル化の進展にともない、全世界の生産拠点における技術、技能レベルの標準化が大きな課題となっています。これまで当社が培ってきたモノ創りのための有形無形の資産を、海外拠点においても若い世代に継承していくことが、「ヤマハの品質」をこれからもお客さまに提供していくためには不可欠と考えています。

2009年には、前年11月にインドネシアに開所した、世界各地域におけるモノ創り技術の標準化と人材育成を目的とした生産技術者教育施設「グローバルトレーニングセンター」の運用を進め、モノ創りに欠かせない知見やスキルの向上に取り組んでいます。この施設には、大会議室や教室などの座学エリア、溶接・機械加工・組立・塗装・完成検査などの訓練を行う実技エリアなどを備えており、インドネシアでの新規採用者をはじめ、タイやベトナムといった周辺国からも研修生を受け入れて世界共通のカリキュラムに沿った教育を実施しています。



グローバルトレーニングセンター



「セオリーの理解」と受講生自身による「気づき」のための訓練

「二輪車乗車と脳の活性化の関係」についての研究を産学連携で実施

ヤマハ発動機は2008年5月より進めていた、東北大学の加齢医学研究所・川島隆太研究室との共同による「二輪車乗車と脳の活性化の関係」についての研究結果を、2009年3月に公式発表しました。今回の研究で当社からは実験用二輪車や研究テストコースの提供、スタッフの派遣などを行い、実験・研究の結果から、二輪車に乗ることで脳が活性化されること、日常的に二輪車に乗ることがメンタル面においてもストレス軽減などのポジティブな影響を与えることが証明されています。2009年以降も研究は続いており、二輪車以外の乗り物との比較実験や分析を進めています。



携帯型の脳活動計測器を装着した実験

- ▶ お客さまとともに
- ▶ 製品開発とモノ創り
- ▶ お客さま対応／サービス
- ▶ 安全運転普及活動

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

お客さま対応／サービス

お客さまへの対応やサービスについての取り組みをご紹介します。

お客さま:

- ▶ 製品開発とモノ創り
- ▶ お客さま対応／サービス
- ▶ 安全運転普及活動

お客さま

お客さま対応／サービス

お客さまの声を活かした品質づくりのために

ヤマハ発動機に寄せられるお客さまからのご意見・ご要望は、製品やサービスへの期待の表れであり、一つひとつに対する誠実な対応が、お客さまの満足高めヤマハへの信頼につながると考えています。そして、お客さまの製品への評価や使用状況を知り、品質改良や将来の製品づくりに活かすために、販売店やグループ会社のサービス関連部署を通じて集められる情報とともに、お客様相談窓口へ寄せられた声を情報共有し、サービス対応の強化に取り組んでいます。

例として、日本のお客様相談窓口では、国内のお客さまからの問い合わせ・相談を日々受けるなかで、製品・サービスの改善の必要性もしくはその可能性がある判断された内容については、お客さまのご要望・ご意見と窓口の判断を関連部署に連絡し、また製品の改良やサービスの改善、Webサイトや販売店を通じたお知らせなどの実施を確認することで、対応の強化を行っています。

製品に関する問い合わせ先：<http://www.yamaha-motor.co.jp/faq/contact/>

リコール関連情報：<http://www.yamaha-motor.co.jp/recall/>

プライバシーポリシー：<http://www.yamaha-motor.co.jp/policy/>

モーターショーを通じたお客さまとのコミュニケーション

ヤマハ発動機グループは、モーターショー等の展示イベントも二輪車のお客さまとのコミュニケーションを深める重要な機会の一つと捉え、製品や開発中の技術の展示を通じて企業ビジョンへの理解浸透に取り組んでいます。

2009年10月23日から11月4日まで開催された東京モーターショーでは、2010年夏の市販を目指して開発を進めている「エレクトリック・コミューター」をはじめ、電動二輪車や電動アシスト自転車の今後の可能性の一端を示した参考出品モデル、研究開発中のハイブリッド技術、燃料電池を使ったポータブル型発電機などの展示を行い、多くのお客さまのご来場をいただきました。

また、今回の東京モーターショーでは新たな試みとして各種の試乗会が実施され、当社は国内外の6社による二輪車の試乗会、当社単独となった電動アシスト自転車の試乗会に参加しました。実際に製品を体験することでお客さまに理解を深めて



第41回東京モーターショーの展示ブース



5日間合計で約2000人の方が電動自転車PASを体験試乗

いただくと同時に、運営スタッフとして立ち会った従業員にとっても、お客さまとのコミュニケーション・理解をさらに深める機会となりました。

多様化するニーズに応え、会員制マリンクラブのプログラムを拡充

ヤマハ発動機では、より多くの人たちにマリンレジャーの魅力を体験していただくために、2006年から会員制のマリンクラブ「Sea-Style（シースタイル）」を運営しています。2009年3月には、会員から寄せられた要望に応じてプログラムを拡充し、「Sea-Style MASTER（マスター）」と「Sea-Styleマリン塾」の導入を行いました。

「Sea-Style MASTER」は、多様化するレンタルボートへのニーズに対応したもので、通常プログラムで使用しているクラブ艇に加えてサロンクルーザーの利用も可能になっています。

「Sea-Styleマリン塾」は、ボートの特性や基本操作を習得するための“レッスンコース”、クルージングの事前計画から運航までが学べる“FUNクルーズ講座”、釣りを楽しみたいお客さま向けの“ゼロから始めるボートフィッシング講座”などで構成されています。また、クラブ会員以外でもボート免許をもった人であれば誰でも受講できるようになっています。

ヤマハ発動機グループではクラブ艇やマリーナの充実などとともに、気軽にマリンレジャーを楽しむことができる環境づくりや安全普及、マナー啓発に今後も取り組んでいきます。



ヤマハ発動機グループは日本におけるマリンレジャー黎明期より普及に取り組んでいます



「Sea-Style MASTER」で使用する当社製のサロンクルーザー「SC-30」

安心と信頼のための店舗づくりとサービス

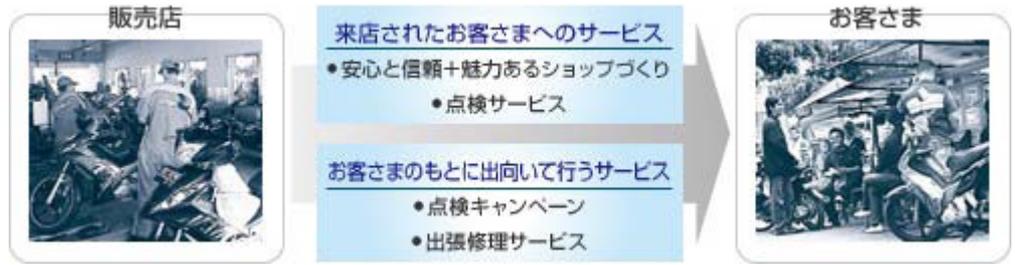
ヤマハ発動機グループでは、アセアン地域や中南米をはじめとする世界の各地で、2007年に改定されたVI（ビジュアル・アイデンティティ）を導入した店舗の刷新を進めています。定期点検やメンテナンスのために訪れたお客さまが、実際の作業の様子を見ることができ、待つ時間を快適に過ごすことができるスペースを設置するとともに、作業ロスやミスを未然に防ぐために効率的かつ充実した設備や工具を備えたサービススペースの設置を進めています。

また、店舗が近くにないお客さまに対しては、適切なメンテナンスの重要性に対する理解の浸透を図るとともに安全に製品を使用してもらうために、地域の代理店や販売店と共同で点検キャンペーンや出張修理サービスを実施しています。

店舗を訪れるお客さまへのサービスと、お客さまのもとに向いて行うサービス、そのどちらにおいても根底にある考え方は、「安心」と「信頼」を感じていただくことによって「お客さま満足」の向上をめざすというものです。

当社グループでは、店舗や設備の刷新、的確な接客マナーや十分な説明スキルを身につけるためのスタッフ指導、補修部品の供給体制の拡充といった総合的なサービス向上への取り組みを、各地の状況や実態を考慮しながらグローバルに推進しています。

販売店とお客さまの関係におけるサービスの役割についての考え方



ガーナで無料点検キャンペーンを実施

ヤマハ発動機では、アフリカなどの社会インフラやサービス体制の整備があまり進んでいない地域のお客さまについても、海外市場開拓事業部がヤマハ製品とサービスの提供を行い、事業を通じた現地の生活改善、発展の支援に取り組んでいます。

2009年の事例としては、ガーナ共和国で実施した船外機とモーターサイクルの無料点検キャンペーンがあります。船外機については漁村3カ所に向

いて、二輪車については現地の代理店を訪れたガーナ官庁やNGO団体、国連などのライダーを対象に、製品の点検と使用状況や要望についてのヒアリングを実施しました。こうした活動で得られた情報は、製品の改善・改良に活用されています。



船外機の無料点検サービスキャンペーン

「安心」、「安全」、「環境への配慮・貢献」によるお客さま満足の向上

2009年にヤマハ発動機販売が国内に導入した「VMAX（ブイマックス）」の販売では、“メンテナンスパッケージ・ロードサービス・盗難補償”などのお客さまの「安心」につながる新たなサービスプログラムを採用しています。また、

「VMAX」を購入されたお客さまには、他の製品を購入されたお客さまと同様に、サーキット施設などを活用したオーナーミーティングも実施しています。ヤマハ発動機販売では、二輪車のお客さまとヤマハ二輪販売店、ヤマハ発動機販売の3者が相互に協力しあい緑化運動などを通じて環境意識を高める活動「Love the Earth YAMAHAキャンペーン」を実施するなど、「安心」、「安全」、「環境への配慮・貢献」によるお客さま満足の向上に取り組んでいます。



2009年8月に開催されたオーナーミーティング

「Love the Earth YAMAHAキャンペーン」についてはこちら
<http://www.yamaha-motor.jp/mc/earth/>

サービスを支えるスタッフの育成「ヤマハテクニカルアカデミー」

お客さまの満足の継続的な維持向上のためには、最前線にいるディーラースタッフの対応・サービスの質向上に努め、安心と信頼をいただくことが欠かせません。ヤマハ発動機では、ディーラースタッフが新規購入から購入後の点検整備、さらに買い替えにいたるまでの全てのステージにおいて、必要とされる知識・技術・接客スキルを体系的に身に付けていくために、「ヤマハテクニカルアカデミー（YTA）」の導入をグローバルに推進しています。YTAのプログラムは、広範囲にわたる知識を習得する座学と、製品の取り扱い方法や状況に応じたメンテナンス等の実地研修、検定試験で構成されています。また、マニュアルや教材は日本語・英語・スペイン語・フランス語・中国語・ポルトガル語の6ヶ国語が用意されています。またYTAの一環として、サービスマカニックが実技・学科・接客の分野でサービスの「技」を競う、「テクニシャンGP（グランプリ）」を世界各地で開催しており、10回目を迎えたインドネシアのテクニシャンGPには9,500人が参加しました。



YTAのトレーニングセンター（ブラジル）



インドネシアのテクニシャンGPは一般にも公開しショールームで開催

ベトナムの販売店を対象に「3S」コンテストを開催

ヤマハ発動機グループでは、顧客満足度の向上に欠かせない要素についての共通認識を高めていくために、販売（Sales）、メンテナンス等の技術サービス（Service）、補修部品（Spare parts）の頭文字をとって「3S」と定義しています。2009年10月には、日常業務をテーマにした設問に回答する形式で知識や接客技術を競いあう「ヤマハ3Sコンテスト」が、YMVN（ベトナム）の企画・運営のもとで開催され、ベトナム全国から150店の販売店が参加しました。



- ▶ お客さまとともに
- ▶ 製品開発とモノ創り
- ▶ お客さま対応／サービス
- ▶ 安全運転普及活動

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

安全運転普及活動

安全運転の普及をめざした、グローバルな取り組みをご紹介します。

お客さま:

▶ 製品開発とモノ創り

▶ お客さま対応／サービス

▶ 安全運転普及活動

お客さま

安全運転普及活動

お客さまの安全運転技能向上のために

ヤマハ発動機グループでは安全運転普及活動をより積極的に推進していくために、「ヤマハライディングアカデミー（YRA）」をグローバルに展開しています。YRAのプログラムは、安全普及、モータースポーツ普及、製品普及の3つの要素を統合・体系化したもので、安全普及に関しては、各国の社会環境や交通環境、ユーザー事情に適合したカリキュラムのもとで活動を実施しています。二輪車を中心にATVやPWC（パーソナルウォータークラフト）、スノーモビルなどの製品領域で取り組みを行っており、アセアン、中南米、中東、ロシア、アフリカなど、近年市場が急成長し、安全運転についての指導や啓発教育が社会的な課題となっている地域でも活動を推進しています。

また、2008年にはヤマハ発動機グループでは海外で初となる常設のトレーニング施設をタイに開所、二輪車の安全運転実技用のトレーニングコースのほか、大会議室やレクチャールーム、シミュレータールームを備えた総合的な運営を行っています。タイでは二輪車の交通事故が社会的な問題となっており、現地法人TYMでは約25年に及んで二輪車の安全普及活動に取り組んできています。2005年からはタイ運輸局との共同により、各地で年間50～70回の安全運転講習を行うとともに、政府機関の公式テストの実施による運転免許資格証（免許証発行に必要な証明書）の発行も行っています。この施設は、タイのお客さまの安全運転技能の向上とともに、アセアン地域のディーラーを対象としたインストラクターの養成にも活用されています。

TYM：Thai Yamaha Motor Co., Ltd.



タイのトレーニング施設



技術習得のために講習をうけるライダー



安全運転についての講義



危険を伴わずにさまざまな状況を体験学習するためのシミュレーター

科学的な理解によって安全意識の向上を図る 「YSRS（ヤマハセーフライディングサイエンス）」

ヤマハ発動機グループでは、実技講習だけにとどまらず知識面での理解を深めてもらうことで安全運転の普及に取り組んでいます。各国の行政や教育機関と連携しながら青少年を対象に展開している「YAMAHA SAFE RIDING SCIENCE（ヤマハセーフライディングサイエンス）」は、二輪車の運転に関わる慣性力・摩擦力・衝撃力・運動エネルギーについての物理的な解説や、脳の認知・判断・操作による危険予知・周囲からの被視認性についての重要性を科学的に学んでもらうために、独自に制作した分析映像を用いながらインストラクターによる補足説明や体験型の講習を行うものです。

この取り組みは、学生は科学的な理論を用いた講義への関心が高く、理解も進みやすいという調査結果にもとづいており、日本からはインストラクターの派遣とマスターとなる教材を提供、現地法人と連携して社会状況や交通環境にあわせたカリキュラムのローカライズ対応を行って安全運転普及に取り組んでいます。活動は東南アジアを中心に展開してきましたが、急速な市場成長などによって交通安全意識やマナーの向上の取り組みが社会の課題となってきたり、インドや中南米での取り組みも始まっています。



カリキュラムは学生との質疑応答やディスカッションも交えて実施



午前中に講義で学んだことをその日の午後に実技で体験

世界各地で警察などの公的機関を対象とした運転講習を実施

ヤマハ発動機グループでは、社会全体での安全運転の普及を考えた場合に欠かせない、警察などの公的機関を対象とした安全運転技術の講習にも取り組んでいます。これもYRAの一環であり、二輪車やPWC（パーソナルウォータークラフト）、ATVなどの製品領域で、日本からのインストラクター派遣と専用カリキュラムによる継続的な活動を実施しています。



アルゼンチンとセネガルでの講習の様子

産業用無人ヘリコプターの安全運転普及

無人ヘリコプターによる農薬などの散布技術を競う「第18回全国産業用無人ヘリコプター飛行技術競技大会」が、(社)農林水産航空協会と全国産業用無人ヘリコプター推進協議会の共催で2009年11月に茨城県で開催され、ヤマハスカイテックは当日開催された「安全フライトに関する講習会」に協力しています。



- ▶ お客さまとともに
- ▶ 製品開発とモノ創り
- ▶ お客さま対応／サービス
- ▶ 安全運転普及活動

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

株主・投資家

関連するIR情報へのリンクページです。

CSR（企業の社会的責任）:

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

株主・投資家

株主・投資家の皆さまとのコミュニケーション

ヤマハ発動機では当社グループの多方面にわたる活動について、株主や投資家の皆さまに正確で適切な情報を迅速に提供し説明責任を果たすために、IR戦略チームを設置して国内外で積極的なIR活動を行っています。

2009年度は、2月に2008年度の本決算発表を行い、3月に定時株主総会を開催、5月、8月、11月には2009年度の第1四半期、第2四半期、第3四半期の決算発表を行いました。

このほか、アメリカ、シンガポールでのIRミーティングや、IRホームページでの情報開示の充実、個人投資家向けのホームページの運営も行っています。さらに、個別の取材依頼については、本社所在地での対応に加え、証券アナリスト・投資家の皆さまの便宜を考慮した東京での対応も積極的に行いました。



2009年12月期 本決算発表



株主や投資家の皆さまに向けた情報は、
本ウェブサイトの「IR情報」で開示しております。

- ▶ **IR情報**
<http://www.yamaha-motor.co.jp/profile/ir/index.html>
- ▶ **配当方針**
<http://www.yamaha-motor.co.jp/profile/ir/stockholder/dividend/index.html>
- ▶ **ディスクロージャーポリシー**
<http://www.yamaha-motor.co.jp/profile/ir/policy/index.html>

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR 情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

従業員

従業員への取り組み姿勢や方針についてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク：

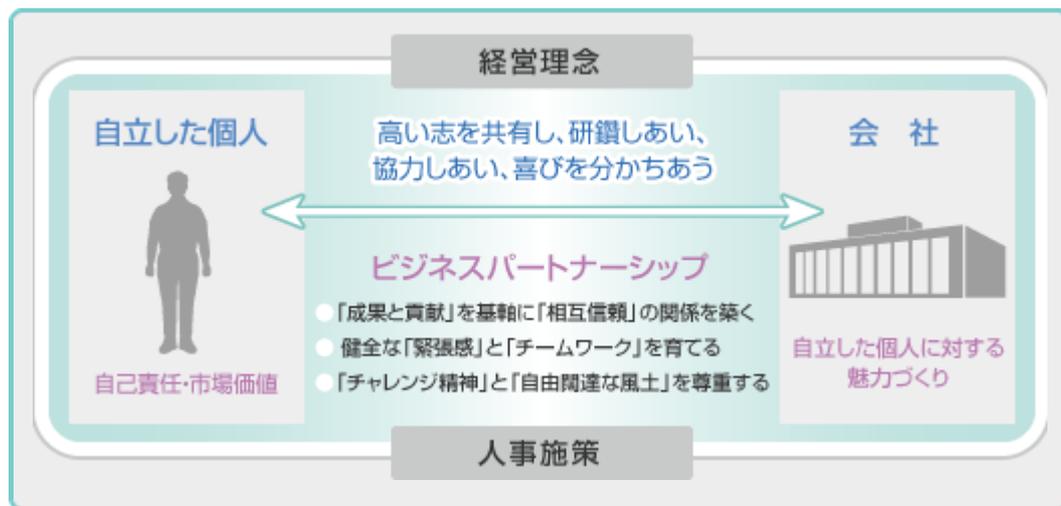
- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

従業員

多様性が尊重され 個人と会社が高め合う職場づくり

ヤマハ発動機グループでは、人事方針として、個人と会社が「高い志を共有し、研鑽しあい、協力しあい、喜びを分かちあう」関係を築き、そうした関係を基盤に一人ひとりの高い力が結集されることで、社会に対して貢献できる有用な企業活動を展開し、持続可能な社会の発展に寄与することをめざしています。

経済などの外部環境がグローバルに激しく変化する状況であってもお客さまの期待に応え続けるためには、自ら考え責任を持って行動する従業員と、それを育む活気に満ちた職場づくりを欠くことはできないと考えており、個人の活躍と会社の成長を支えるものとして、さまざまな人事施策を構築しています。



- ▶ 従業員とともに
- ▶ 仕事と生活の両立支援
- ▶ 多様性を活かした職場づくり
- ▶ 職場の安全衛生
- ▶ 人材育成／キャリア支援

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

多様性を活かした職場づくり

ダイバーシティへの配慮など、活力ある職場づくりの取り組みをご紹介します。

従業員:

▶ 多様性を活かした職場づくり

▶ 人材育成／キャリア支援

▶ 仕事と生活の両立支援

▶ 職場の安全衛生

従業員

多様性を活かした職場づくり

各自が個性を尊重し合うことで活力ある職場をつくる

ヤマハ発動機グループは「企業活動の原点は人」という基本的な認識のもとで、人権に対する考え方を『倫理行動規範』の中で明示しており、活力ある職場の実現のためには、まず各自が個性を尊重し合う環境づくりが欠かせないと考えています。

具体的な取り組みとしては、従業員と会社の関係を「ビジネスパートナーシップ」、会社が担う役割を「自立した個人に対する魅力づくり」と定義した人材施策の一環として、全ての正規従業員を対象としたキャリアサーベイを行っています。これは各自に与えられた業務について本人の自己評価と上司による評価を実施しながら、今後3年間のキャリアプランについて相談の機会を設けるものです。

2009年の活動としては、前年度に改定した人事制度の社内浸透を図るとともに、適正な運用のための管理職層を対象とした考課者研修を実施しています。

ヤマハ発動機グループの人権に対する考え方

- 基本的人権の尊重** 私たちは、基本的人権を尊重し、いたずらに人種、国籍、思想、生活信条、身体、性格、親族等について、誹謗中傷したり、相手の人格を否定するような言動は行いません。
- セクシュアルハラスメントの禁止** 私たちは、男女を問わず、職場で、セクシュアルハラスメントに当たる発言、行為は行いません。
- パワーハラスメントの禁止** 私たちは、職場における地位や上下関係を背景に、相手の人格、尊厳を継続的に侵害するような行為を行いません。

※『倫理行動規範』より

障がい者の安定雇用の実現

ヤマハ発動機は、「障がい者と健常者が一緒に就労できる職場運営を行う」という考えのもとに「障がい者雇用促進委員会」を設置しています。各部門に配置した担当委員による業務分析などにより職場環境の整備に取り組んでいます。

2009年12月31日現在では重度障がい者85名、軽度障がい者69名の計154名が活躍しており、障がい者雇用率は2.02%となっています。また、障がい者を多面的に支援するために、手話教室や要約筆記研修の実施など、より円滑なコミュニケーション実現のための取り組みにも力を入れています。



手話教室

■ 定年後の再雇用制度の定着

ヤマハ発動機では定年後の再雇用制度を導入しており、60歳の定年以降も就労する意欲のある人材が、業務経験で培った知識やスキルを発揮できるだけでなく、若手従業員にとって有益な経験やノウハウを継承する制度として定着しています。

■ 社員意識調査

ヤマハ発動機では、いきいきとした職場づくりのための社員意識調査を継続的に実施して、社員の意識・実態把握に努めています。2009年度の調査（2009年10月実施・無作為抽出で5,240名が対象）では、経営・職場・仕事・上司・人事制度・コンプライアンスの各カテゴリーで設問を設定し、調査結果の分析から抽出された課題については、経営層や各部門長へのフィードバックミーティングを実施して施策への反映を行っています。働くことへの満足感・会社への愛着・誇りについては高評価となっていますが、社内コミュニケーションに関しては改善の余地が見られ、経営トップ・各部門・各職場において「直接対話」を中心とする施策を展開しています。

▶ 従業員とともに

▶ 多様性を活かした職場づくり

▶ 人材育成／キャリア支援

▶ 仕事と生活の両立支援

▶ 職場の安全衛生

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)

[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

人材育成／キャリア支援

人材の育成やキャリア形成支援についての取り組みをご紹介します。

従業員:

▶ 多様性を活かした職場づくり

▶ 人材育成／キャリア支援

▶ 仕事と生活の両立支援

▶ 職場の安全衛生

従業員

人材育成／キャリア支援

グローバルな人材育成

グローバルにビジネス展開するヤマハ発動機グループでは、必要な人材育成のための海外研修や留学制度を設けています（2009年の利用者は、海外研修2名、海外留学2名）。さらに、英語・中国語・スペイン語・ポルトガル語・インドネシア語を学ぶ自己啓発講座も実施（2009年の受講者は延べ409名）するなど、グローバルに活躍できる人材の育成に取り組んでいます。

海外赴任者に対しては、海外勤務に必要な業務スキルに加え、日本とは異なる文化や社会環境についての知識や倫理について事前に学ぶ、駐在要員育成研修を実施しており、2009年には内容の見直しを行い、2010年より運用を開始しています。また、多様な業務を経験することを通じてマルチスキル度を高める施策として、若手従業員の積極的な異動も実施しています。

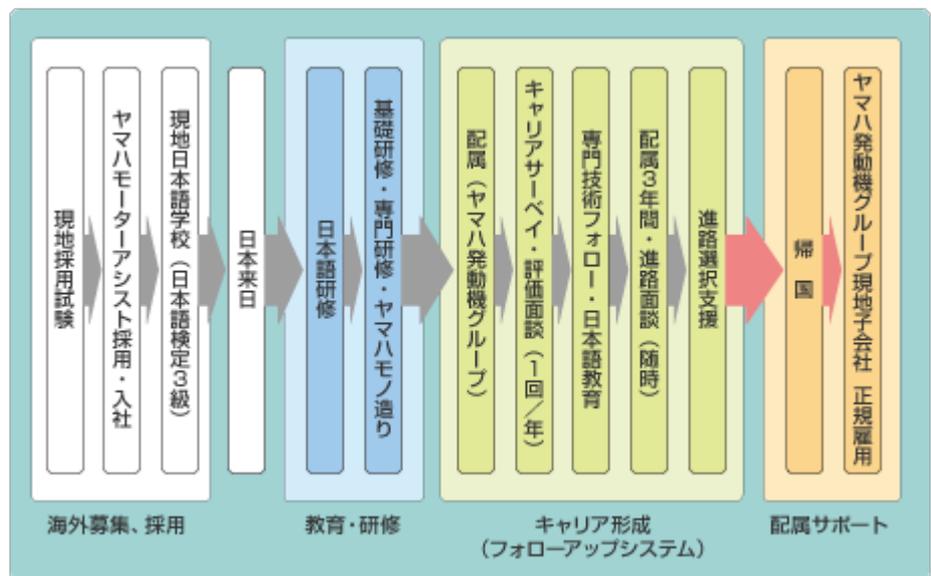
グループ会社における取り組み

ヤマハモーターアシストでは、2008年から国際人材育成プログラムの運用を開始しています。このプログラムは、アジア等で拡大を続ける海外市場のグループ会社において、将来リーダー的存在となる優秀な技術者の育成を目的としており、現地での採用後に日本語や基礎スキルを習得する期間を設け、必要なレベルに達した段階で日本での勤務を経験する仕組みとなっています。

2008年には11名、2009年には8名の対象者をインドネシアで採用、ヤマハ発動機もしくは国内グループ会社で3年間にわたる技術習得および育成プログラムに取り組んでいます。



インドネシアで実施された筆記試験



ヤマハモーターアシストの国際人材育成プログラム

TYM (タイ) の人材開発プログラムが「エクセレンス・イン・プラクティス賞」を受賞

2005年からコンピテンシー開発を重視したスタッフ・マネジャー教育プログラムを実施しているTYMが米国人材開発機構 (ASTD) から2008年度「エクセレンス・イン・プラクティス賞」を受賞。2009年6月にワシントンで表彰式が行われました。経営への貢献など5つの点で高く評価され、アセアン域内では初の受賞会社となっています。



TYM : Thai Yamaha Motor Co., Ltd.

キャリア形成の支援

ヤマハ発動機グループでは、キャリアは仕事上だけで形成されるものではなく、仕事外での経験も含めた「生きるうえでのキャリア」と定義し、「やりがいを持って仕事をしたい」、「自分の生き方に自信をもちたい」などといった従業員側の視点に立った、キャリア形成サポートに努めています。

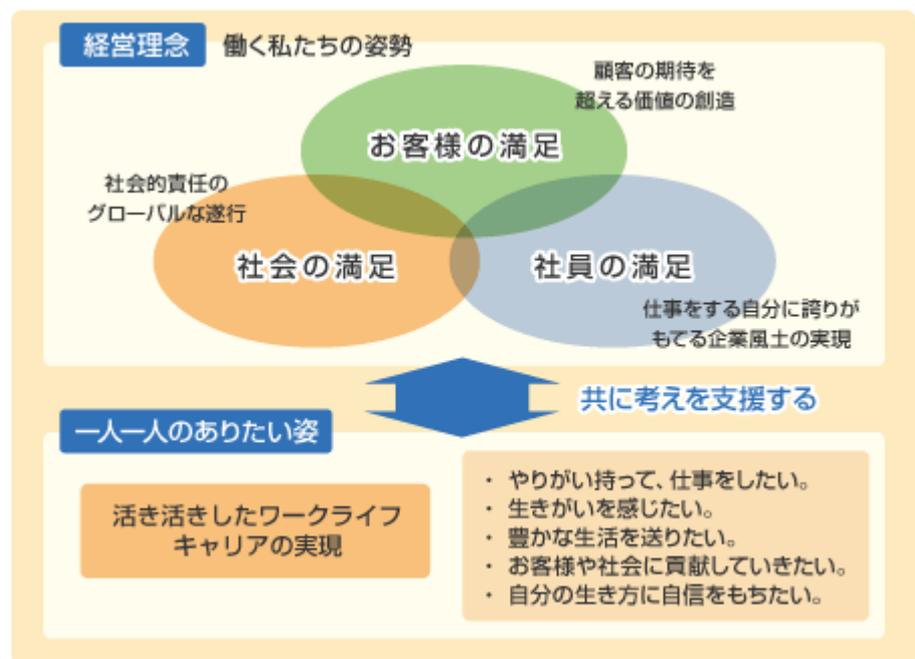
ヤマハ発動機では、「人は誰でも、自分の目標に向けて、自らを発展させようとするマインドを持っている」という基本認識に基づいて「キャリア支援室」を設置し、従業員一人ひとりのキャリア形成を支援しています。

2009年は、新任基幹職を対象とした2日間のキャリア研修を開催、また、社内イントラを通じたキャリア支援のための定期的な情報発信に取り組みました。個別面談によるキャリア相談に関しては、2009年度の新規受付は250名となっています。



キャリア形成支援ツールの資料より

個別面談によるキャリア相談に関しては、2009年度の新規受付は250名となっています。



経営理念（企業）と個人の関係のイメージ

■ ビジネスリーダーの育成

ヤマハ発動機では、将来の経営を担う人材を育成することを目的として、2003年から「ヤマハビジネススクール（YBS）」を開催しています。経営者を囲んでの経営塾、外部講師を招いて実施するテーマ別セッション、各種専門家による自己開発プログラムなどをカリキュラムとし、ヤマハ発動機の「経営のDNA」の継承による10年、20年先の競争力の維持・向上に努めています。2009年は48名が受講、2003年からの延べ参加人数は470名となっています。

■ セルフバリューデザインのための機会提供

人材育成には、画一的なモデルやパターンがあるわけではなく、一人ひとりにあったキャリアアップの道があります。ヤマハ発動機では、近年、激しく変化しているビジネス環境においては、そのステップを所属・役職など現在の延長線上で描くのではなく、「自らの意志に基づき、将来の自らの価値を設計する」というセルフ・バリュー・デザイン（自己価値設計）の考え方が、強く求められるようになってきていると認識しています。

ヤマハ発動機では、1998年に社内公募制である「セルフ・バリュー・チャレンジ制度（SVC）」を導入して以来、全社的に、海外駐在あるいは新規プロジェクトの立ち上げなどに際して、その要員を広く募集しています。この制度は上司の承認を得ることなく応募する仕組みとなっており、2009年度は14件の公募を実施、16名が異動しています。

（1998年からの延べ公募件数＝240件、延べ異動人数＝185名）

- 従業員とともに
 - 多様性を活かした職場づくり
 - 人材育成／キャリア支援
- 仕事と生活の両立支援
 - 職場の安全衛生

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

仕事と生活の両立支援

従業員のワークライフバランス実現のための取り組みををご紹介します。

従業員:

▶ 多様性を活かした職場づくり

▶ 人材育成／キャリア支援

▶ 仕事と生活の両立支援

▶ 職場の安全衛生

従業員

仕事と生活の両立支援

仕事と生活の両立支援（ワークライフバランス）

従業員のワークライフバランス（仕事と生活の両立）の実現を支援するため、ヤマハ発動機では多様な働き方を選択できる体制の整備を進めています。

フレックスタイム制度や定時退社デー、育児や介護のための休職制度、さらに事業所内託児施設「わいわいランド」を設け、休職者に対しては休業中の定期的な情報提供を行うとともに、円滑に復職するための環境整備にも努めています。

2009年には短時間勤務制度の導入を行うなど、従業員の状況に適した選択肢の充実に取り組んでいます。また2009年の有給休暇の取得率[※]は76%となっています。

※ 全社員の「年間有給休暇発生日数」に対する実際の「年間取得日数」

ヤマハ発動機の主な育児・介護支援制度

制度	内容
育児休職	子どもの満2歳の誕生日まで休職可能 (2009年取得：女性113人 男性3人)
介護休職	1年以内で本人が申請する期間で休職が可能 (2009年取得：男性2人)
看護休暇	小学校就学前の子どもを看護するための休暇を、子ども1人の場合は年間5日まで、子ども2人以上の場合は年間10日まで取得可能
フレックスタイム制度	6：30～21：45の時間内で労働時間の設定が可能 ※コアタイム 例＝10：15～15：00
勤務の軽減	小学校の就学に達するまでの子どもを養育する従業員、または家族を介護する従業員に対しては、時間外労働の制限や深夜業務免除
短時間勤務制度	2時間の勤務時間短縮が可能 (2009年取得：女性45人)
その他	<ul style="list-style-type: none"> 定時退社デーの設定（毎週水曜日、当社休日の前日、給与日、賞与日） 3日連続有給休暇取得（30歳以上は5歳毎に5日連続取得）

▶ 従業員とともに

▶ 多様性を活かした職場づくり

▶ 人材育成／キャリア支援

▶ 仕事と生活の両立支援

▶ 職場の安全衛生

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

職場の安全衛生

従業員が安全な職場環境で健康に働くための取り組みをご紹介します。

従業員:

- ▶ 多様性を活かした職場づくり
- ▶ 人材育成／キャリア支援
- ▶ 仕事と生活の両立支援
- ▶ 職場の安全衛生

従業員

職場の安全衛生

安全な職場づくり

ヤマハ発動機では、中央安全衛生委員会が中心となって安全な労働環境の整備をグローバルに推進しています。導入から5年目となった労働安全衛生マネジメントシステム（OSHMS[※]）に基づいてリスクアセスメントを実施、職場の潜在的な危険性や有害性の発見につとめ、労働災害防止活動に取り組んでいます。また、設備の安全化とともに、安全管理者研修や監督者の能力向上研修などの階層別の教育・研修、安全衛生大会の開催などによって安全を支える人材育成にも取り組んでいます。

2008年から進めているグループ会社へのシステム導入については、2009年までに国内の6社がグループ認証を取得しています。2010年は、4社（国内3社・海外1社）を対象にグループ認証の取得を計画しており、これまでの国内やアジア地域に加え、北米・南米でもシステム導入に着手します。



グループ認証の授与（ヤマハモーターエンジニアリング）



グループ認証の授与（東洋精器）

2009年に認証を取得した事業所

地域	事業所名
国内	ヤマハモーターエンジニアリング
	東洋精器

※OSHMS：Occupational Safety & Health Management System

心と体の健康のためのサポート

ヤマハ発動機では、従業員の心と体の健康維持・改善を支援するためにさまざまな活動を推進しています。

生活習慣病の予防・改善については、ウォークラリーイベントの開催や年2回の「歩け歩け運動」の実施などを通じて運動習慣を身につけてもらい肥満防止や持久力の向上に努めるなど、健康で活力のある職場づくりに取り組んでいます。また、禁煙の取り組みを支援するために、健康保険組合との協力で希望者に対する禁煙補助剤の提供を行っ

ています。喫煙率については2008年の36.3%から35.6%と減少傾向となっています。メンタルヘルスに関するサポートとしては、産業医による保健指導、新任基幹職・監督者を対象としたメンタルヘルス研修、海外駐在員や中途で入社した社員に対する支援といった取り組みを引き続き実施しています。



ウォークラリーイベント

- ▶ 従業員とともに
- ▶ 多様性を活かした職場づくり
- ▶ 人材育成／キャリア支援
- ▶ 仕事と生活の両立支援
- ▶ 職場の安全衛生

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)



取引先

取引先への取り組み姿勢や方針についてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク：

- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

取引先

サプライヤーとの協働を深め 持続的な成長に取り組む

ヤマハ発動機グループの製品は、多種多様な部品・資材で構成されており、国内外のさまざまなサプライヤーとの協働で成り立っています。そして、事業のグローバル化の進展によって海外現地工場での調達比率が高まり、サプライチェーン全体もより複雑に拡大していくなかで、企業の社会的責任という観点での「調達」の重要性はさらに高まってきていると考えています。

当社の購買取引基本方針では、まず「オープンドアポリシー」をうたい、国籍や会社の規模、取引実績の有無にかかわらず、参入機会を国内外に広く提供しています。そして、取引先の選定にあたっては、可能性のあるすべてのサプライヤーへの公平な情報開示と、コンプライアンスやリスクマネジメント、経営方針まで含めた総合的な評価を行うことで「公正・公平な取引」の徹底を図っています。また、倫理行動規範や関連法規の遵守、機密の保持、環境保全や資源保護といった課題についても、社内外での講習会やセミナー、日常のコミュニケーションやアンケート調査などを通じた意識向上に努めながら、サプライチェーン全体を見据えた取り組みを進めています。

2009年1月には事業横断的な組織として調達本部を新設、グローバル規模での新たな体制構築に取り組んでいます。同時に「相互信頼・相互繁栄」を基点とした「サプライヤーと商品事業の持続発展に貢献する」ことを部門のミッションとして明確に定め、サプライヤーとともに持続的な成長の実現に取り組んでいます。

ヤマハ発動機の購買取引基本方針

- **オープンドアポリシー**
実績のあるお取引先のみでなく、新しいお取引先からの購入に心がけるとともに、そのお取引先を広く世界に求めています。
- **公正・公平な取引**
お取引先の選定は、品質、価格、納期、安定供給などの継続性・信頼性、ならびに実績についての公正・公平な評価に基づいて行います。また、購買品目の仕様、数量、取引条件の情報は厳格に管理するとともに取引を希望し契約の成立する可能性のあるお取引先に公平に開示します。
- **遵法・機密保持**
購買取引にあたっては、取引に関する法令を遵守するとともにその精神を尊重します。お取引先との購買取引において知り得た営業上および技術上の機密は、お取引先の承諾なしには第三者に開示しません。
- **地球環境重視**
調達にあたっては資源の有効活用に心がけ、環境保全、資源保護に積極的に取り組みます。
- **相互信頼・相互繁栄**
お取引先との相互信頼を大切にし、持続的な相互繁栄の考え方のもとに、お取引先と協調して購買行動に取り組めます。

➤取引先の皆さまとともに

➤グリーン調達／サプライヤーとのパートナーシップ

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲このページの先頭へ

Copyright (C) Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved

グリーン調達／サプライヤーとのパートナーシップ

CSRや環境に配慮した調達活動やサプライヤーとのパートナーシップについてご紹介します。

取引先:

▶ [グリーン調達／サプライヤーとのパートナーシップ](#)

取引先

グリーン調達／サプライヤーとのパートナーシップ

グリーン調達を推進

ヤマハ発動機グループの製品は、多くのサプライヤーから調達した部品・資材で成り立っています。また、グローバル経済の進展でサプライチェーン全体での標準化や情報管理などのシステム構築の重要性はさらに増しており、サプライヤーとのパートナーシップが不可欠であると考えています。

モビリティに関わるメーカーとして、事業活動や製品における環境負荷物質の低減やエネルギー・資源の効率利用にも積極的に取り組んでおり、グリーン調達ガイドライン（03年制定、08年に改訂第10版を発行）をはじめとする基準・情報をサプライヤーと共有しています。2009年には、CSRの取り組みという観点においても重要な、サプライヤーとの連携を深めるために、「調達先CSRガイドライン」の策定を進めました。

ヤマハ発動機グループグリーン調達ガイドライン（PDF:日本語/英語/中国語）はこちらでご覧いただけます。

<http://www.yamaha-motor.co.jp/profile/csr/environmental-field/publish/>

災害などのリスク発現への備え

ヤマハ発動機グループの事業拠点やサプライヤーの多くは、予想される東海地震の地震防災対策強化地域内に集中していることもあり、製品の安定供給体制の確立という点においてもサプライヤーとの緊密な連携が不可欠であると考えています。地震などの災害発生時に迅速な復旧が行えるように事業継続計画（BCP）の整備を進めており、リスクの評価、その低減のための対策、マニュアルの作成・配布、日々の教育や訓練を実施しています。

災害復旧システムの開発・導入については、グループ会社だけでなくサプライヤーに対するシステムの導入や生産設備などのハード面の対策支援も行っており、人命の安全については「災害発生後2日間での確認」、生産復旧の方針としては「災害発生後2週間で生産再開準備完了」と定めています。

2009年8月に発生した駿河湾沖地震で被害の発生はみられませんでした。地震後に災害情報システムの運用手順をあらためて検証し、「災害対応手順書」の策定を行いました。



復旧用機材（発電機）の操作訓練

公正な取引、法令遵守の徹底

持続的かつ発展的な事業活動には信頼関係がその基盤としてあることが必須です。そのためにはサプライチェーン全体で公正な取引が行われていることが不可欠であると考えています。

ヤマハ発動機グループでは、経済産業省から発行されている「自動車産業適正取引ガイドライン」を踏まえたうえで、下請法などの法令遵守に努めるとともに、サプライヤー各社に対しても適切な情報共有や取引における同様の取り組みをお願いしています。

また、法令だけにとどまらず、ヤマハ発動機グループの倫理行動規範の開示や講習会などを通じた、信頼関係の基盤づくりにも努めており、今後も事業活動の根幹に「お客さまの安全・安心」をおき、人権や文化・慣習の尊重、地域社会との関係や地球環境への配慮、情報の保護・管理といった社会的な責任を満たした、総合的な取引関係の構築を進めていきます。



関係者を対象に開催された「取引先業務連絡会」

- ▶ 取引先の皆さまとともに
- ▶ グリーン調達／サプライヤーとのパートナーシップ

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#)

[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)



地域社会

地域社会への取り組み姿勢や方針についてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）:

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

地域社会

地域社会に密着した 社会貢献活動の推進

ヤマハ発動機グループの活動拠点は、世界各地に所在し、地域社会の人々に支えられて事業活動を行っています。また、私たちの製品が世界各地の人々に利用され、より豊かな生活に役立つよう願っています。私たちは企業と地域社会との共存共栄を図り、持続可能な関係が重要であるとの認識に立ち、そのためには地域のステークホルダーの皆さまと日常的なコミュニケーションを通じて、信頼関係を維持・向上することが大切であると考えています。

2007年には4つの活動領域に重点化し、これまで培ってきたスポーツやモノ創りを通して将来を担う人たちの育成をはじめ、事業活動から得られた交通安全普及や環境などに関するさまざまな知見を生かした活動を進めています。また、従業員一人ひとりが自主的に活動する「4万人のV作戦」をスローガンとした活動も推進しています。

これからも当社グループの持つ技術やノウハウ、グループ各社の施設など企業の持つ資源をもとに、行政・学校・NPOなど地域社会の皆さまと協働しながら、地域社会に役立つ活動を進めていきたいと考えています。

ヤマハ発動機グループの社会貢献活動方針

ヤマハ発動機グループは、経営理念に掲げる「社会的責任のグローバルな遂行」を通じて社会貢献に努め、持続的な社会の発展に寄与する企業をめざします。これまで培ってきた人材、技術などの経営資源を活かし、将来を担う人たちの育成、地球環境の保全、交通安全普及、地域社会の課題解決を推進します。従業員の自主的な社会貢献活動を支援します。

社会貢献活動の重点領域

取り組みテーマ		グローバル課題		ローカル課題	
		将来を担う人たちの育成	地球環境の保全	交通安全普及	地域社会の課題
活動	社会との共存のための社会貢献	<ul style="list-style-type: none"> ・ スポーツを通じた心身の育成 ・ ものづくりを通じた創造性の育成、など 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地球環境保全 ・ 生物多様性の尊重、など 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会への交通安全教育 ・ 啓発活動、など 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当社製品や人材、ノウハウを使った地域支援、など

- ▶ 地域社会とともに
- ▶ 社会貢献活動の事例
- ▶ 従業員によるボランティア活動の事例

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

Copyright (C) Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved

社会貢献活動の事例

地域社会に対する貢献活動の事例をご紹介します。

地域社会:

▶ 社会貢献活動の事例

▶ 従業員によるボランティア活動の事例

地域社会

社会貢献活動の事例

「持続可能な社会の発展」をめざすために、ヤマハ発動機グループは、本業を通じた社会への貢献はもとより、社会との共存のための社会貢献を果たすべく、グループ会社が所在する地域をはじめ、世界のステークホルダーとのコミュニケーションを通じて数々の社会貢献活動に取り組んでいます。

将来を担う人たちの育成



ヤマハ発動機グループの多くが所在する静岡県西部の中核都市である浜松市の科学館は、古くからものづくりが盛んな地域性を反映し、近隣の製造系企業から寄贈を受けたさまざまな遊具や教育用に制作された機器類が展示されていることが特徴と・・・

▶ [全文とその他の事例はこちら](#)

地球環境の保全



ヤマハ株式会社とヤマハ発動機の共同プロジェクトとして、両社が生産・販売拠点を置くインドネシアで、植林を通じて環境保全や教育支援による社会貢献をおこなう「ヤマハの森」活動。2005年からの5ヵ年計画で進められてきた活動の最終年度となる・・・

▶ [全文とその他の事例はこちら](#)

交通安全普及



警視庁交通部が主催する「高齢者交通安全モデル地区自転車実技教室」が2009年9月に東京・世田谷の警視庁交通安全教育センターで開催され、ヤマハ発動機販売では、電動アシスト自転車の安全な乗り方講習や試乗会の運営サポート・・・

▶ [全文とその他の事例はこちら](#)

地域社会の課題



1995年に発生した阪神・淡路大震災で、災害時の情報収集や物資の搬送における二輪車の機動力があらためて見直されて以来、日本の各地でボランティアを含むバイク隊が編成されています。ヤマハ発動機グループの多くが所在する静岡県は、東海地震・・・

[▶ 全文とその他の事例はこちら](#)

- [▶ 地域社会とともに](#)
- [▶ 社会貢献活動の事例](#)
- [▶ 従業員によるボランティア活動の事例](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

Copyright (C) Yamaha Motor Co., Ltd. All Rights Reserved

将来を担う人たちの育成

地域社会における人材育成への貢献をめざした活動事例をご紹介します。

社会貢献活動の事例:

▶ 将来を担う人たちの育成

▶ 地球環境の保全

▶ 交通安全普及

▶ 地域社会の課題

地域社会

将来を担う人たちの育成

「パワーアシストつなひき」を浜松科学館に寄贈

ヤマハ発動機グループの多くが所在する静岡県西部の中核都市である浜松市の科学館は、古くからものづくりが盛んな地域性を反映し、近隣の製造系企業から寄贈を受けたさまざまな遊具や教育用に制作された機器類が展示されていることが特徴となっています。

ヤマハ発動機では、風を起こしながらディンギーヨットを進ませるシミュレーションゲームを以前に寄贈しており、20年以上の間、多くの子どもたちに親しまれてきましたが、2009年にはここ数年急速に普及が進んでいる電動アシスト自転車の動力ユニットを使った「パワーアシストつなひき」を新たに制作し、寄贈を行いました。この体験型機器は、動力ユニットが納められた中央から延びる2本のロープのうち1本は人力のみ、もう1本には電動アシストが加わるもので、親子や友達同士で綱を引き合いながら「力の原理」や「技術」について学習してもらえるようになっています。



電動アシストの仕組みを図解したパネルの前で綱引きを楽しむ子どもたち

事業で培った技術や知識を活用した学生向けの講座を実施

ヤマハ発動機は、モーターサイクル、マリン、その他の事業製品のモノ創りで培った技術や知識を活用し、子どもたちの「モノ創りの心を育む」活動を続けています。

『ボートふしぎ発見講座』は、船が浮く仕組みや船の形の違いによるスピードの違いを分かりやすく解説する実演や、クリアファイルを使ったボートの模型作りと競争を体験してもらう講座です。小学生が主な対象となっており、参加した子どもからは、「重い船が浮く理由がよくわかった」「自分のボートが作れて楽しかった」といった声が寄せられています。

また、ヤマハ発動機では、学術的なモノの見方や考えだけでなく、実務での経験に基づいた捉え方を学生に身につけてもらうために、実務経験が豊富な従業員を大学に講師として派遣する「企業講座」についても継続的に取り組んでいます。



	ボートふしぎ発見講座		大学講座	
	参加人数	講座回数	参加延べ人数	講座回数
2007年	18人	1回	2081人	43回
2008年	321人	16回	2280人	44回
2009年	540人	32回	2243人	43回

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問い合わせ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

地球環境の保全

地域社会における地球環境の保全への貢献をめざした活動事例をご紹介します。

社会貢献活動の事例:

- ▶ [将来を担う人たちの育成](#)
- ▶ [地球環境の保全](#)
- ▶ [交通安全普及](#)
- ▶ [地域社会の課題](#)

地域社会

地球環境の保全

5年間に及んだインドネシアでの「ヤマハの森」プロジェクトを完了

ヤマハ株式会社とヤマハ発動機の共同プロジェクトとして、両社が生産・販売拠点を置くインドネシアで、植林を通じて環境保全や教育支援による社会貢献をおこなう「ヤマハの森」活動。2005年からの5カ年計画で進められてきた活動の最終年度となる2009年度は、2010年3月までに26ヘクタールで苗木26,000本の植林を実施しました。(5年間の合計は120ヘクタール・苗木112,000本)

活動を行ったスカブミ県プラブハンラトゥ郡は、首都ジャカルタから100kmほど南下したジャワ島西部に位置し、近海漁業の基地として栄えてきま

したが、県庁の移転に伴う都市計画の推進を機に森林伐採が進んだことで、慢性的な生活用水の不足が課題となっています。植林によって天然林に近い環境を再生、それが生活用水の安定供給につながることを目指した取り組みを中心に、森林保全活動が将来にわたって持続されていくための環境教育活動、学用品や備品の提供による教育支援、共同水場の建設といった地域住民を支援する活動にも取り組んできています。

5年間に及んだ活動は、アジア・太平洋地域で「農村開発」「人材育成」「環境保全」「普及啓発」を行っている(財)オイスカのサポートを受けるとともに、行政機関の協力のもとでヤマハ株式会社とヤマハ発動機、両社の現地法人8社が推進しました。



2009年12月に実施された5回目の植林イベントには、1,900名以上が参加

[CSR トップページ](#) | [CSR の考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

交通安全普及

地域社会における安全運転普及への貢献をめざした活動事例をご紹介します。

社会貢献活動の事例:

- ▶ [将来を担う人たちの育成](#)
- ▶ [地球環境の保全](#)
- ▶ [交通安全普及](#)
- ▶ [地域社会の課題](#)

地域社会

交通安全普及

「高齢者交通安全モデル地区自転車実技教室」に協力

警視庁交通部が主催する「高齢者交通安全モデル地区自転車実技教室」が2009年9月に東京・世田谷の警視庁交通安全教育センターで開催され、ヤマハ発動機販売では、電動アシスト自転車の安全な乗り方講習や試乗会の運営サポートを行いました。

この講習では、普通の自転車よりも発進時の負担が少ないため、楽に漕ぎ始めることができ、ふらつきも少ない、といった高齢者の使用に適した特性をもつ電動アシスト自転車を活用し、一時停止や安全確認の励行や、事故の減少につながる安全な乗り方についての理解促進が図られました。

近年、高齢者の人身事故は増加傾向にあり、こうした活動への協力とともに、ヤマハ発動機グループの自主的な活動としても、定期点検や購入などでお客さまが販売店を訪れる際に注意喚起を行うなどの安全啓発活動に取り組んでいきます。

「高齢者交通安全モデル地区」＝高齢者の皆さんへの交通安全教育や交通事故実態を踏まえた交通指導取締り、交通安全施設の整備等、交通事故防止に向けた講習会等の活動を集中的に行う地区（警視庁ホームページより転記）



講習会では電動アシスト自転車の特性についての説明も実施

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#) [電動バイク](#) [電動自転車](#) [マリン製品](#) [製品一覧](#) [企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#) [ラグビー情報](#) [ペーパークラフト](#) [グループリンク](#) [部品情報検索](#) [リコール情報](#) [ニュースリリース](#)

地域社会の課題

地域社会における課題解決への貢献をめざした活動事例をご紹介します。

社会貢献活動の事例:

- ▶ 将来を担う人たちの育成
- ▶ 地球環境の保全
- ▶ 交通安全普及
- ▶ 地域社会の課題

地域社会

地域社会の課題

静岡市オフロードバイク隊の訓練をサポート

1995年に発生した阪神・淡路大震災で、災害時の情報収集や物資の搬送における二輪車の機動力があらためて見直されて以来、日本の各地でボランティアを含むバイク隊が編成されています。ヤマハ発動機グループの多くが所在する静岡県は、東海地震の発生に対する防災意識の高い地域であるため、バイク隊の整備が早くから進んでいる地域です。

静岡市消防防災局に属する静岡市オフロードバイク隊もそのうちのひとつで、ヤマハ発動機は隊員の皆さんが災害時に安全かつ確実な任務を遂行するためのライディングトレーニングを実施しています。

災害を受けた道路状況を想定したさまざまな実践的トレーニングを行う「オフロード基本操縦訓練」を、当社の施設「トレールランド浜北」（静岡県浜松市）を使用して毎年開催しており、2009年8月に発生した駿河湾沖地震の際にも「迅速な被害状況の収集と報告が行えたことで、日頃の訓練の成果を確認できた」と伺っています。

また、ヤマハモーターエンジニアリングとヤマハ発動機販売では、警告灯やサイレンスピーカー、バックアップ電源などを装備した「赤バイ」（消防活動二輪車）の開発・販売も行っており、東京消防庁や（財）日本消防協会、市町村の消防本部などで使用されています。



駿河湾沖地震の発生直前に実施されていた2009年の訓練会

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

[バイク・スクーター](#)
[電動バイク](#)
[電動自転車](#)
[マリン製品](#)
[製品一覧](#)
[企業情報・CSR情報](#)
[レース情報](#)
[ラグビー情報](#)
[ペーパークラフト](#)
[グループリンク](#)
[部品情報検索](#)
[リコール情報](#)
[ニュースリリース](#)

従業員によるボランティア活動の事例

従業員による地域社会でのボランティア活動の事例をご紹介します。

地域社会:

▶ [社会貢献活動の事例](#)

▶ [従業員によるボランティア活動の事例](#)

地域社会

従業員によるボランティア活動の事例

ヤマハ発動機グループでは、企業活動としての社会貢献活動に加え、従業員によるボランティア活動についても、社内イントラネットの情報提供システムを活用したサポートを行っています。ここでは日本国内における一部の事例についてご紹介します。

さまざまな社会貢献活動の情報を社内で共有促進

ヤマハ発動機グループでは、社内イントラネットの情報提供システムを活用したボランティア活動についての情報提供を行っています。掲載される情報は、国内外のグループ会社による社会貢献活動や従業員によるボランティア活動の報告をはじめ、NPOなどの関連団体の紹介、ボランティア活動に必要なさまざまな知識、活動スケジュールなどで、活動に参加を希望する従業員はシステムを使って活動グループへの登録ができるようになっていきます。

また、従業員のボランティア意識の啓発と行動を始める“きっかけ作り”として2004年から「4万人のV作

戦[※]」を展開しています。従業員がボランティア活動を少なくとも年1回はすることによって、ヤマハ発動機グループ全体で4万人が社会貢献をすることを目指しています。2009年の活動延べ人数は43,742人で、2年連続の目標達成となりました。

※この活動を開始した2004年当時のグループ従業員数が約4万人のため、Vはボランティアのことを指しています。



書き損じはがき等の収集による募金活動

ヤマハ発動機グループの従業員によるボランティア活動の一つには、書き損じはがきや使用済み切手、ペットボトルキャップ、プリペイドカードの収集活動があります。

2009年は、書き損じはがき1,071枚（48,195円相当）を磐田ユネスコ協会に、使用済み切手8.8kg（8,800円相当）をNPO法人静岡県ボランティア協会に、ペットボトルキャップ290,800個（727kg、ワクチン363.5人分）をNPO法人エコキャップ推進協会に寄付しています。これらの寄付は関係団体を通じて貧困国の子供たちを支援する活動やタイでの象の保護活動に使われています。

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

地球環境

地球環境への取り組み姿勢や方針についてご紹介します。

CSR（企業の社会的責任）:

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク:

- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

地球環境

持続可能な発展をめざした地球環境との共存

地球温暖化が進行し、エネルギー、水資源、生物多様性などの環境・資源問題が世界レベルで深刻化しています。ヤマハ発動機グループは、小型内燃機関や電気モーターをコアテクノロジーとして、パーソナルモビリティや船外機など、さまざまな製品をグローバルに提供しており、そうした企業の社会的責任として、これらの課題に真摯に対応することが求められていると考えています。

私たちは、こうした社会的課題に対する認識をさらに高め、当社グループの強みを活かした活動を進めていきます。なかでも、当社グループのビジネスの基軸であるパーソナルモビリティが果たす役割は非常に大きいと認識しており、技術革新による高品質で環境負荷の小さい小型ビークルをはじめ、東京モーターショーで発表した電動アシスト自転車、電動二輪車の提供、ハイブリッドシステムの研究開発や、事業で培った人、モノ、ノウハウをつかった社会貢献活動の推進など、企業活動の全てにおいて地球環境との調和に配慮することが重要であると考えています。

これまで当社グループでは、「世界の人々に新たな感動と豊かな生活を提供する」ことを企業目的として、多様な価値の創造に努めてきましたが、今後も、地球温暖化などの環境問題への対応をはじめ、全体調和の中で持続的な社会の発展とともに成長を目指していきます。

環境活動の方針と計画

ヤマハ発動機グループ 地球環境方針

スローガン	「人と自然の調和をめざして」	
基本方針	ヤマハ発動機グループは、かけがえのない地球の美しい自然を未来に引き継ぐために、地球とともに生きていることを自覚し、限りある資源を大切に、幅広く社会との連帯・協力を図り、あらゆる活動の場でチャレンジし続けます。	

ヤマハ発動機グループ 環境計画2010

	自然環境課題	グループの重点取り組み	2010年目標
めざす姿	「製品・サービス」と「環境貢献」	「環境トップランナー製品・技術の開発」「健康増進事業の推進」	事業計画に織り込まれ推進されている
	「温室効果ガス」と「気候変動」	「燃費向上」「省エネ」と「クリーンエネルギー」	CO2原単位削減30%※（1990年を基本とし、グループ会社毎に目標を設定）
	「有害物質」	「排出ガス低減」「環境負荷	自主規制値クリア、有害物

課題	と「健康・安全」	物質の管理と低減」	質：ゼロ
	「廃棄物」と 「資源保護」	「3Eで3Rを」「水使用量の低減」 3E：つくりやすく、直しやすく、分解しやすく 3R：リデュース、リユース、リサイクル	製品・工場：リサイクル100%、「ロングライフ」の達成
姿勢	環境活動を 保証する仕組み	「グループ全体の環境管理システムを構築し運営」	グループ全体の運営とローカルな活動との連携が取れている
	環境取り組み姿勢	「継続的な環境教育による意識改革」	グループ全員が高い目標意識で環境取り組みを積極的に行っている
	地域との共生	「感覚環境（臭気、騒音など）の改善」「地域とのコミュニケーション」	企業市民として地域から信頼され、敬愛を受けている
	情報の公開	「環境を切り口とした積極的な情報発信」	環境先進企業として社会から高い評価を受けている

※原単位：製品1台当りの燃費、その他は売上高に対するエネルギー使用量を意味する。

- ▶ 地球環境とともに
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 2009年の計画と実績
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み

環境関連情報

- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ FRPプール エコリニューアル
- ▶ バイク・スクーター車種別環境情報
- ▶ FRP船リサイクルシステム
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ バイオマスプラスチック製梱包材について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

2009年の計画と実績

環境活動の2009年の計画と実績を一覧にしてご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2009年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション

- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP小型船舶リサイクルシステム

関連リンク:

- ▶ [バイク・スクーター車種別環境情報](#)
- ▶ [FRPプールエコリニューアル](#)
- ▶ [バイオマスプラスチック製梱包材について](#)

地球環境

2009年の計画と実績

めざす姿

2009年計画	2009年実績
「環境の柱」に基づく、製品・サービスの開発	各事業の中期経営計画に沿った開発を推進。中長期を見据えた環境計画の検討を開始

環境保全課題

	2009年計画	2009年実績	
温室効果ガス	1.CO2排出量把握と削減活動	グループ全体で売上あたり1.5%（年平均）の削減	生産量減少にともない、対象110社のうち達成は45社に留まる
	2.製品の燃費向上	各事業部製品ごとに目標設定（2010年 全製品平均燃費：基準年（1990年）比28.5%向上）	各事業部製品ごとにほぼ目標を達成したが、一部製品において未達成
	3.製造段階でのCO2削減	YMC全社製造、総量27%削減（1990年比）	総量55.1%削減（1990年比）達成
	4.物流段階でのCO2削減	原単位（輸送量）で年あたり2%削減（2007年基準）	世界的な経済停滞の影響を受け、原単位（輸送量）で4.8%増加となり未達成（2007年基準）
有害物質	1.製品・排出ガス低減	レギュレーションの前倒し	100%レギュレーションクリア
	2.VOC排出量※1削減（2社※2）	2000年度比50%削減（塗装面積あたり原単位）	2000年度比原単位（塗装面積あたり）で52.9%削減となり達成
	3.グリーン調達活動	国内・海外の全環境連絡拠点にてグリーン調達を推進	「2010年度有害物質ゼロ」をめざし、個々の日程表に基づいて展開中
	4.法律・自主行動基準の遵守	部品含有環境負荷物質把握システム（E-sis）を全26社（拠点の廃止に伴い2008年より1社減少）にて運用	予定していた全26社にて運用が開始され、データ整備が進行中
3R推進	1.開発段階での「3R」推進	リユース&リサイクル可能率95%	製品リサイクル率95%以上をほぼ達成（1モデルのみ未達）
	2.製造段階での「3R」推進	廃棄物の直接・間接埋立量0トン	0トン
		製造部門のリサイクル率100%	100%
	3.製造廃棄物排出量（2社※3）	スーパーゼロエミッション継続	スーパーゼロエミッション継続達成
施策の実行と効果の確認		分別徹底による有価物化などの推進継続	
	担当ショップにリサイクル活動の働	予定していた全てのショップ（3,598店）にリサイクル啓発活動	

廃棄物	4.国内製品 リサイクル体制の確立	きかけ実施 二輪車リサイクルの実施	を実施 二輪車リサイクル台数目標達成 (118%)
		産業用無人ヘリコプターのリサイクルシステムの維持管理	適正処理の周知徹底 (適正処理機体数163機)
		SBRA※4による鉛バッテリーのリサイクルシステム構築に関する情報収集と対応	自工会のバッテリーワーキンググループに参画中
	5.部品梱包材の削減	梱包資材の削減。リターナブル率66%	リターナブル率69.9%達成
	6.販路でのリサイクル推進	アセアン地域における情報収集とその分析	アセアン幹部候補生にエコパートナー教育の実施 主要アジア5拠点にエコパートナー説明会開催
7.水使用量の低減	水使用実態のグローバル把握	対象会社89社に対して、70社(79%)の水使用実態調査完了	

環境活動を保証する仕組み

	2009年計画	2009年実績
1.グループEMSの構築・運営 (ISO14001/ヤマハ自己宣言)	自己認証制度YEMCSのグローバル展開に努める。運用目標65社	新たに6社 (ISO14001:3社、自己認証:3社) がEMS認証を取得して61社となったが未達成
	ヤマハ独自の環境情報ネットワークシステム (G-YECOS) を利用したセルフチェック導入58社	G-YECOS導入済みは67社となり達成
	旧ヤマハマリン※5と活動を統合し認証を取得	旧ヤマハマリンを4月に統合して11月に拡大審査を受審、認証を取得
	環境監査員の増員、140名体制を確保	監査員の養成のための研修会を2回実施、環境監査員は211名となった (実習生含む)
2.環境リスクマネジメント	リスクの見える化と評価により環境リスクの低減を図る	G-YECOSへの情報登録によって見える化を推進したが登録率が低迷。登録率の向上に今後も努める
3.環境管理支援ツールの整備・運用	改正化管法対応 ヤマハマリンへのシステム運用拡大	化管法対象物質見直しに伴うシステム対応完了 旧ヤマハマリンにて化学物質管理システム運用開始

取り組み姿勢

	2009年計画	2009年実績	
環境取り組み姿勢	1.エコライフ活動メニュー拡大	エコ通勤者参加率67%	エコ通勤者参加率68%達成 国交省が制定した、『エコ通勤優良事業所認証』に9事業所が登録
	2.多様なエコ活動の展開・支援	エコポイント制度の定着	エコポイント参加者316人 (昨年比36%減) に留まる
	3.環境マインド・教育	階層別教育に「経営層・部長級教育」を導入	11月に外部講師を招き、「経営層・部長級教育」を実施
1.地域共生活動	4万人のV作戦において、ヤマハグループで延べ4万人参加	環境分野で22,500人、社会貢献分野で21,200人。延べ43,700人参加 (2年連続4万人超えを達成)	
	地域・学校に対する企業環境取り組み	静岡産業大学、静岡理科大学への	

地域との共生	2. 企業社会貢献活動	み講演の実施	企業環境取組講演を実施
		各種研修受け入れを継続	磐田市の向陽中学校の環境研修受け入れ
	地方自治体・研究教育機関・各企業と連携した環境活動の継続	そまの里、ウェルカメビーチクリーン、ヤマハの森などの活動に参加	
3. 自然共生活動	生態系モニタリングの研究、準備の実施	菊川テストコース建設予定地において、開発予定区域内に生息する希少動物に関する、自然環境保全計画書作成した。同計画書に基づき、静岡県と「自然環境保全協定書」を交わした	
情報の公開	1. 情報公開と対話	地域とのコミュニケーションを目的としたイベントへの参加	当社廃棄物処理の実態に関して、地域自治体と対話集会を実施 地域NPO主催の環境イベントに出展（NPOや地域住民とのコミュニケーション）
	2. 製品・技術・サービスでの環境情報発信	東京モーターショーにおいて環境商品の展示	環境商品（EC-03、EC-f、PASerなど）を展示
製品の環境情報の提供を推進		二輪車の車種別環境情報、「3R」設計、リサイクルシステムを始め、油水分離装置、FRPプール、バイオ研究など、ウェブサイトに製品の環境情報を継続的に公開	

※1 製品の単位面積当りの排出量

※2 ヤマハ発動機、ヤマハモーターパワープロダクツ

※3 ヤマハモーターパワープロダクツ、ヤマハモーターエレクトロニクス

※4 鉛蓄電池再資源化協会の略称

※5 2009年1月1日付けでヤマハ発動機と合併

▶ 地球環境とともに

▶ 2009年の計画と実績

▶ 環境マネジメント

▶ CO2排出量削減の取り組み

▶ 環境負荷物質削減の取り組み

▶ 資源循環や使用量削減の取り組み

▶ 生物多様性保全の取り組み

▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション

▶ グループや各工場の環境データ

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報

レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

ホーム > 企業情報・CSR情報 > CSR（企業の社会的責任） > 地球環境 > 環境マネジメント

環境マネジメント

ヤマハ発動機グループの環境活動の推進管理についての情報をご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2009年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP小型船舶リサイクルシステム

関連リンク:

- ▶ [バイク・スクーター車種別環境情報](#)
- ▶ [FRPプールエコリニューアル](#)
- ▶ [バイオマスプラスチック製梱包材について](#)

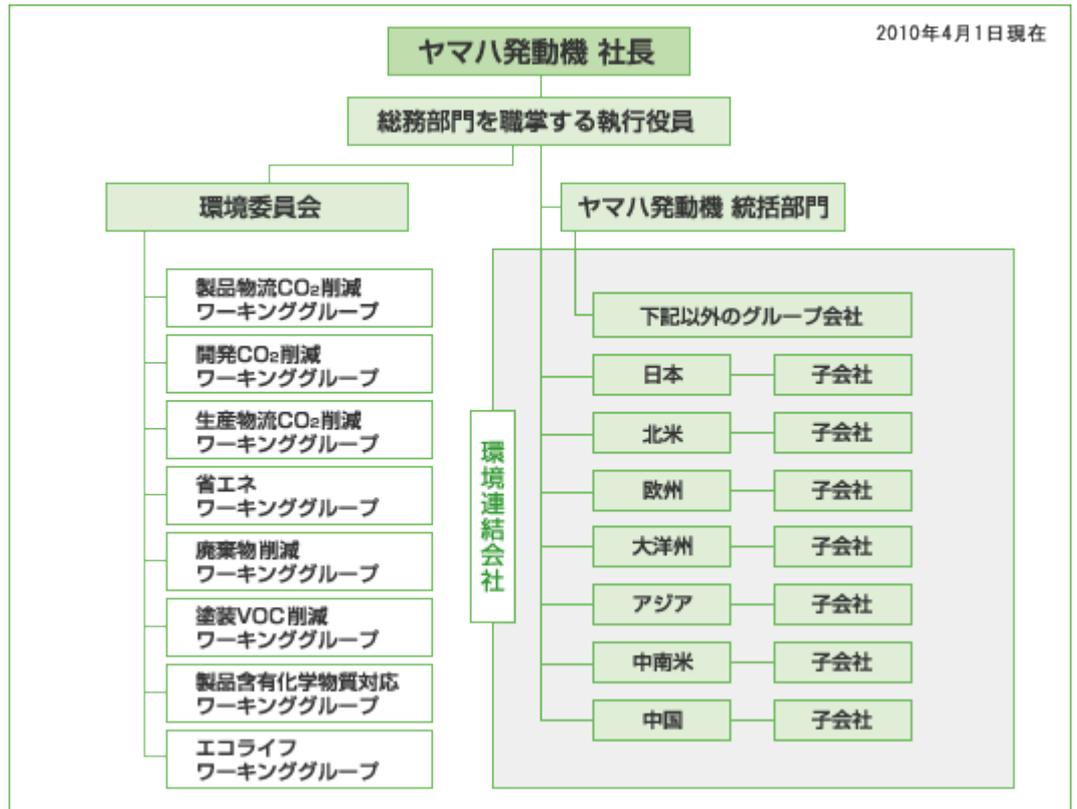
地球環境

環境マネジメント

環境経営を推進する体制

ヤマハ発動機グループでは、総務部門を職掌する執行役員からの諮問を受ける「環境委員会」を国内外における環境活動の中核を担う組織として位置づけています。この委員会が、環境方針やビジョン、中長期の環境計画、環境保全に関する戦略投資案件、環境モニタリングに関する事項および課題への対応、そのほか環境経営に関する重要課題について審議をおこないます。

ヤマハ発動機グループの環境企画・推進組織



環境マネジメントシステム

ヤマハ発動機グループでは、グループ全体で環境保全活動の促進を図るために連結環境経営を推進しています。製造会社を中心に導入が進んでいる環境マネジメントシステムISO14001と並行して、2008年から本格的な運用を開始した社内規格YEMCS（ヤマハ発動機グループ環境マネジメント認定制度）の取得を進めています。

2009年にはISO14001では2社、YEMCSでは3社が新たに認証を取得、2009年12月末時点での取得状況は、グループ会社（環境連結会社）110社中61社（55%）となっています。



YEMCS環境マネジメント認定証

グローバル環境情報ネットワーク（G-YECOS）

ヤマハ発動機グループでは、独自のG-YECOS（グローバル環境情報ネットワークシステム）の展開を進めています。このシステムによって、環境マネジメントシステムISO14001と環境パフォーマンスに関する情報や、環境活動事例をグループ内で共有することで、グループ全体での環境保全活動レベルの向上に努めています。

国内外のグループ会社によるG-YECOS導入によって、「本社」と「各グループ会社」の間だけでなくグループ会社の間においても、各国の環境法適用の状況や各社の環境リスクモニタリングの結果が把握できるようになり、より効果的な環境活動の推進が可能になってきています。

2009年には、日本、北米、中南米、アジア、中国の12社で導入。2009年12月末時点のG-YECOS運用は67社となっています。

Skeeter: Skeeter Products, Inc.

YDLA: Yamaha Motor Distribution Latin America Inc.



Skeeter（北米）でのG-YECOS説明会



YDLA（北米）でのG-YECOS説明会

ヤマハ発動機の環境内部監査

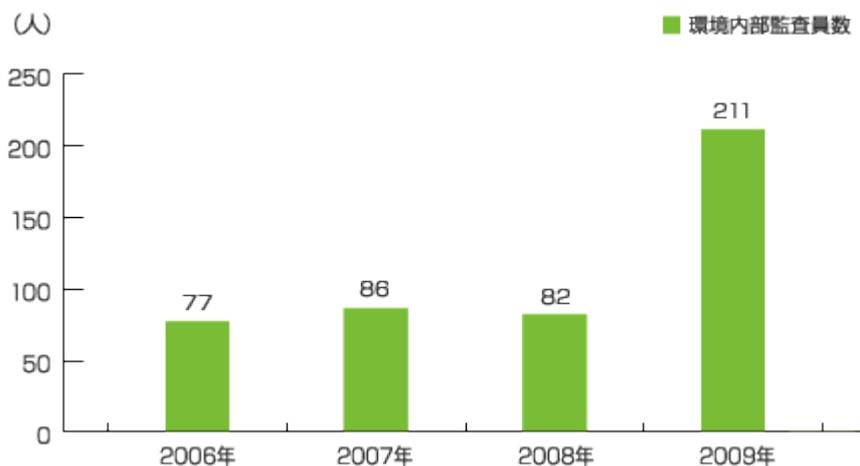
ヤマハ発動機の環境監査体制は、ISO14001規格に基づく内部監査員が実施する「環境内部監査」と「外部審査」で構築されています。環境内部監査では「パフォーマンスの継続的改善」、「リスクコンプライアンス管理の確認」という目的に沿った監査を実施しています。

2009年度は、環境マネジメントシステムの維持・強化を図るために「各組織のセルフチェック機能強化」に取り組み、「各組織1名以上の内部監査員の在籍」を目標とした養成研修を実施。47名の従業員が受講し、国内グループ全体の内部監査員は211名となりました。外部講師による研修会（年2回）を実施して監査員教育の充実にも取り組んでおり、今後も監査をする側・監査を受ける側の相互に有益で効果的な内部監査を実施していきます。



養成研修での外部講師による講義

環境内部監査員数の推移



※2009年の監査員数は、旧ヤマハマリンとISO組織統合による内部監査員80名、監査員養成研修の合格者実習生41名を含む。

環境経営のコスト

ヤマハ発動機では、環境保全活動の定量的な情報開示を行うとともに、より効果的な環境経営を進めるために、環境省による「環境会計ガイドライン（2005年度版）」を参考に、環境対応コストとコストに相応する効果を算出しています。2009年度は、前年度の9社（ヤマハ発動機、メルコ、ヤマハ発動機販売、ヤマハ発動機マネジメントサービス、ヤマハモーターソリューション、ワイズギア、旧ワイエス、旧イー・アンド・エス、サンワード）にヤマハマリン※を加えた10社をYMC（ヤマハ発動機）統合認証ベースとして算定しています。

環境対応コストは設備投資と経費を合わせて約76億円となり、前年度比で約26%の減少となりました。内訳としては、公害防止コストと環境損傷対応コストが増加し、その他のコストについては減少となっています。

※2009年1月1日付でヤマハ発動機に合併

2009年度における環境対応コストとその経済効果（YMC統合認証ベース）

分類	内容	環境対応コスト			経済効果	
		投資	経費	合計	年度内	通年換算
事業エリア内	公害防止コスト	79	781	860	19	20
	地球環境保全コスト	33	88	121	54	97
	資源循環コスト	12	179	191	26	49
小計		124	1,049	1,173	98	165
上流・下流コスト	廃船リサイクルシステム運営 欧州向けの梱包資材削減 グリーン購入、エコ通勤手当	0	215	215	2	130
管理活動コスト	環境ISO運営、環境スタッフ人件費	20	388	409	0	2
研究開発コスト	エコパワーユニット開発、軽量素材開発、環境製品の先行開発	53	5,689	5,742	0	0
社会活動コスト	ビーチクリーン作戦・子ガメ放流会などのイベント 緑化管理	0	15	15	0	0

環境損傷対応コスト	土壌汚染浄化	2	13	15	0	0
合計		199	7,369	7,569	100	297

(単位：百万円) 注) 小数点以下は四捨五入しているため、積算と合計が一致しない箇所があります。

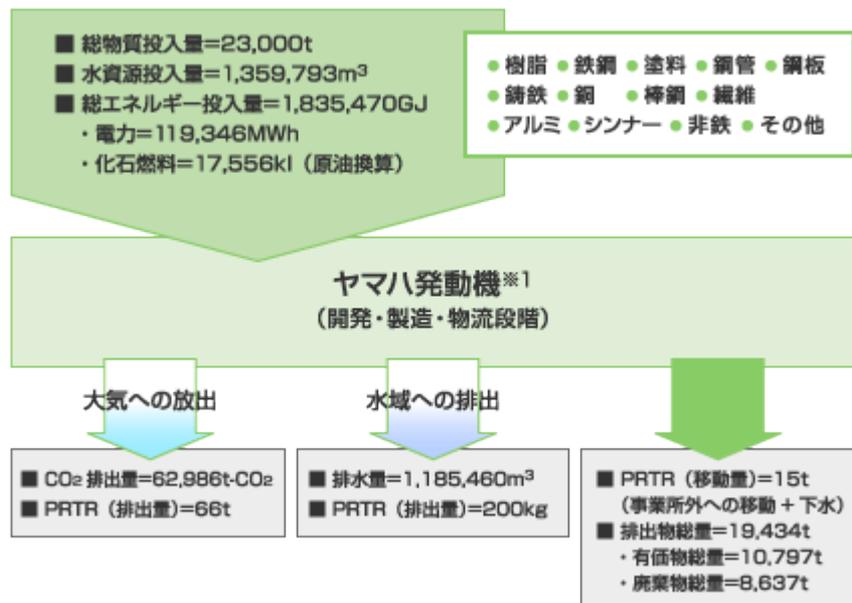
環境保全効果		
分類	年度内	通年換算
削減エネルギー (GJ)	23,185	48,290
CO2低減 (t-CO2)	949	2,025
節水量 (t)	223	29,483
削減廃棄物 (t)	485	813
削減VOC (t)	31	34

環境保全効果は、全て対応コストに対応する推定効果の集計

- 削減エネルギー：電力、石油類、ガス類の削減効果をエネルギー換算
- CO2削減効果：エネルギー起源CO2の削減効果

- 研究開発コスト：販売前提の製品開発は含みません
- 経済効果：「リスク回避」「企業イメージ向上」などのみなし効果については対象としていません
- キャッシュフローをベースに算出しており、減価償却費や積立金などは含まれていません

事業活動と環境負荷



※PRTR関連の数値は、PRTR法によって報告対象となっている全ての事業所を対象としており、自治体への報告期間にあわせ、2009年4月～2010年3月の集計数値となっています（他の項目は2009年1月～12月の集計数値）

- ▶ 地球環境とともに
- ▶ 2009年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

[ご利用規約](#) | [推奨環境・プラグイン](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [お問合せ](#)

[▲ このページの先頭へ](#)

CO2排出量削減の取り組み

CO2排出量削減のための取り組みをご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2009年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP小型船舶リサイクルシステム

関連リンク:

- ▶ [バイク・スクーター車種別環境情報](#)
- ▶ [FRPプールエコリニューアル](#)
- ▶ [バイオマスプラスチック製梱包材について](#)

地球環境

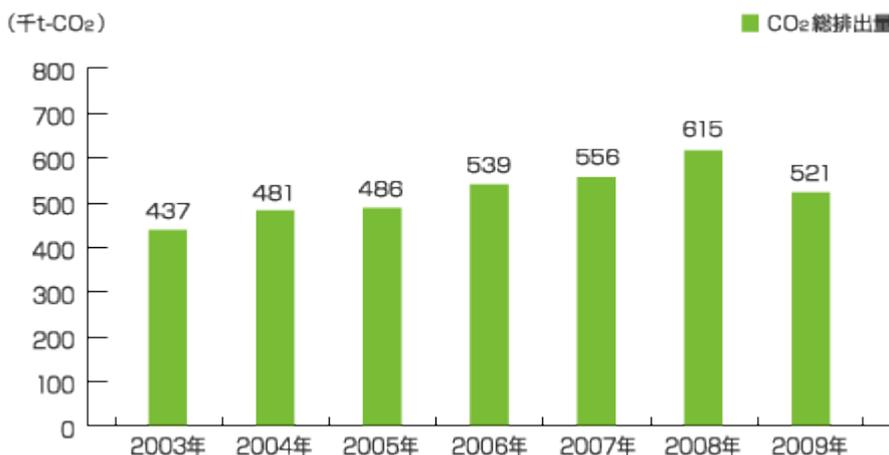
CO₂排出量削減の取り組み

ヤマハ発動機グループは、二輪車を中心とした輸送機器メーカーであり、温室効果ガスの削減を環境分野における最重要課題に挙げた取り組みを進めています。グループ共通の2010年目標としては、「CO2原単位削減30%（1990年度比）」を設定し、製品の開発から製造、使用、廃棄にいたるライフサイクル全体での取り組みを中心に、事業活動全般における温室効果ガスの削減を進めています。

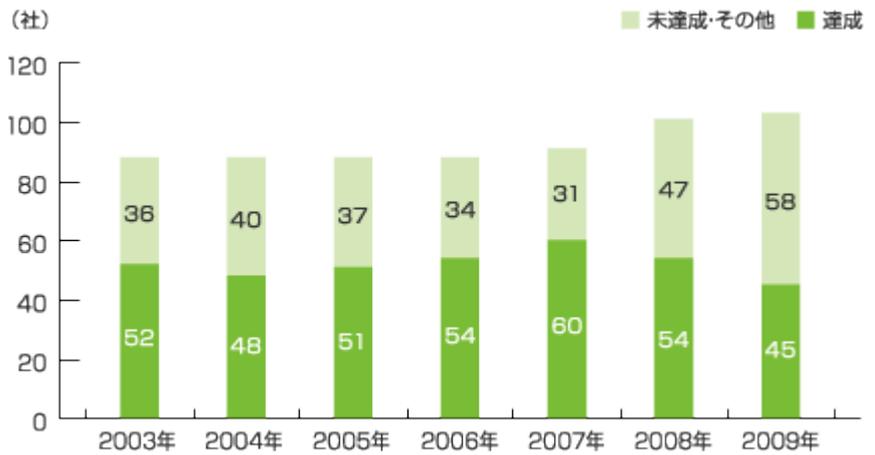
各事業所においては、「売上高原単位あたり年1.5%のCO2排出量削減」を目標に活動を展開しており、2009年には、環境連結会社110社のうちCO2売上高原単位目標把握対象の103社のうち、グループ共通目標を達成した会社は45社（44%）となりました。CO2排出量では、2008年の615千t-CO2に対し2009年は521千t-CO2と94千t-CO2の削減となりました。

今後も、国内、海外のグループ会社のエネルギー使用量削減に向けた活動状況を確認しながら進捗の遅い会社に対して支援を行うなど、効率的な温室効果ガス削減に取り組んでいきます。

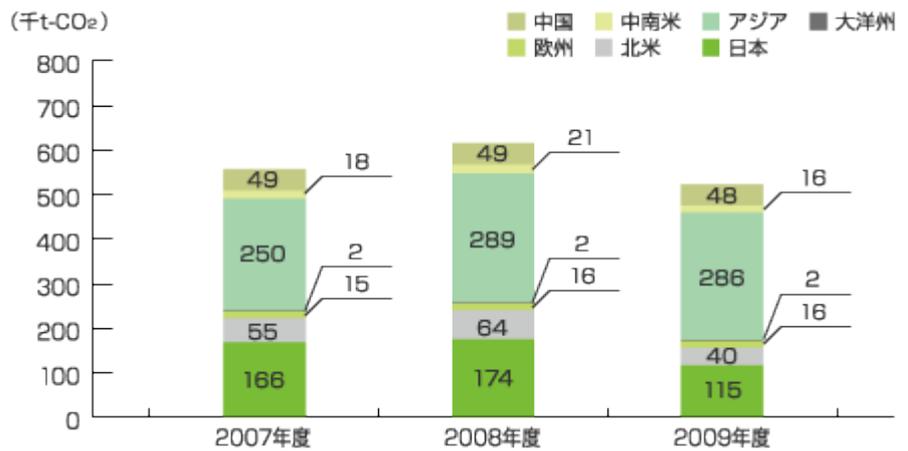
ヤマハ発動機グループ CO2排出量の推移（2009年環境連結110社）



ヤマハ発動機グループ CO2排出量売上高原単位 目標達成会社数推移



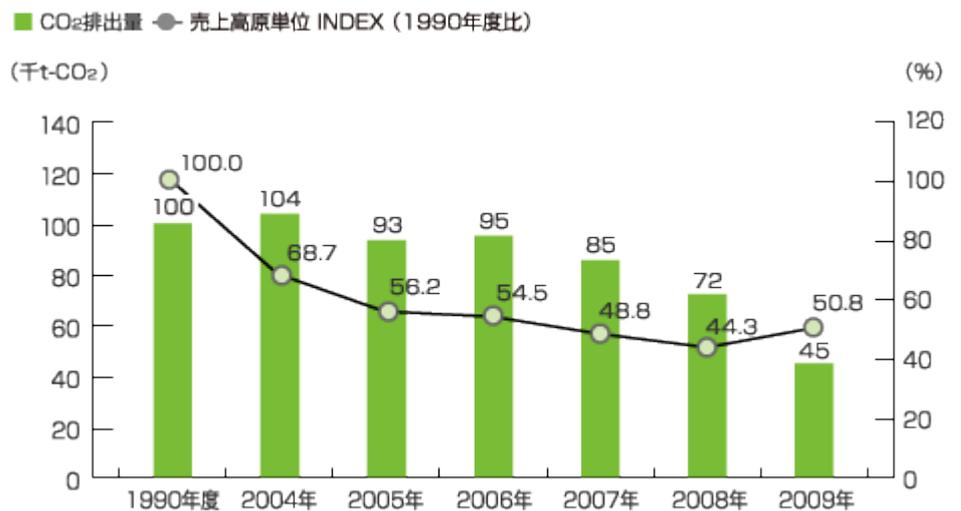
地域別CO2排出量の推移



製造段階におけるCO2排出量削減

ヤマハ発動機では、全社製造枠での2010年目標を26%削減に設定しています。2009年の実績としてはCO₂発生量72,893t-CO₂の目標に対し44,760t-CO₂となり、目標を超える55%削減となっています。新エネルギーの導入状況については、2009年の太陽光発電と天然ガスコージェネレーションによる発電量は27,797kWh（全使用電力の19.5%）で、CO₂削減量は8,617t-CO₂（火力換算）となっています。今後も引き続きCO₂削減をめざし、省エネ設備の導入や運用管理の徹底・改善を進めていきます。

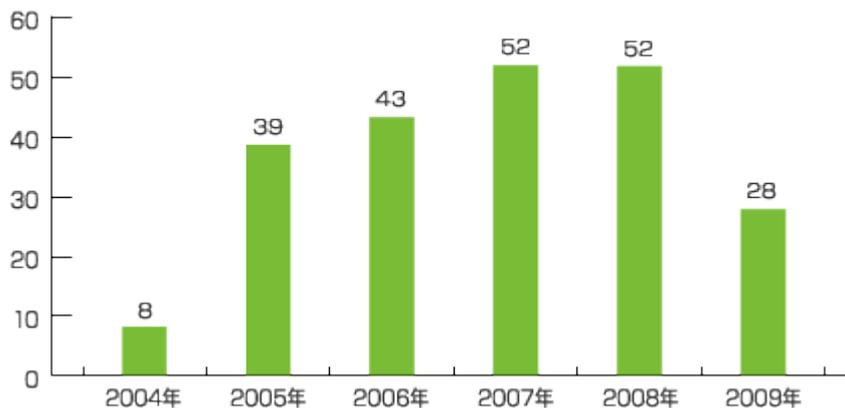
ヤマハ発動機の製造段階におけるCO2排出量・CO2売上高原単位の推移



※旧ヤマハマリン（2009年1月にヤマハ発動機に合併）を含む

ヤマハ発動機の新エネルギー※利用量の推移

(千kWh)



※集計対象：新エネ法で定義されている太陽光発電と天然ガスコージェネレーション

※2009年については、生産量減少で電力の需要全体が減少したことによって新エネルギー利用量も減少

太陽光発電と風力発電の導入

二輪車の外装部品の成形・塗装などを行っている中瀬工場（浜松市）では、2008年に当社では初のケースとなる太陽光発電と風力発電の同時稼働システムを導入しています。2009年の両システムによる発電量は年間25,000kWh（約17トンのCO2削減効果）となっており、同工場の事務所の照明や空調などに使用しています。



NEDOとの共同研究事業として導入した太陽光発電システム（中瀬工場）



プロペラ型に比べ、静粛性に優れた縦型風力発電システム（中瀬工場）



浜松IM事業所



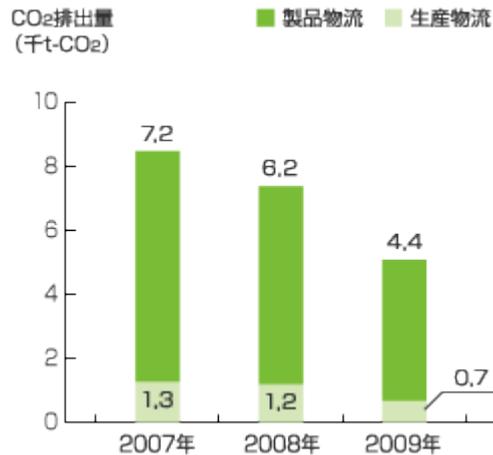
森町工場

物流段階におけるCO2排出量削減

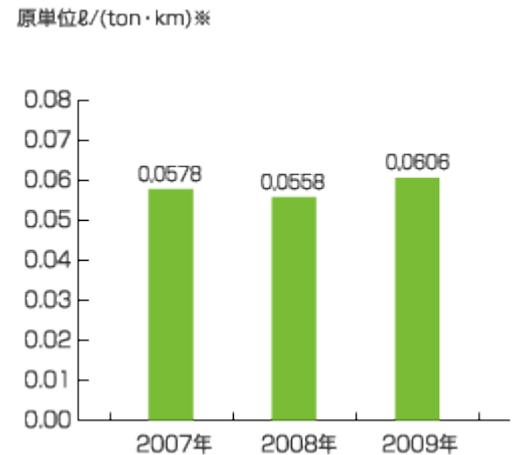
ヤマハ発動機では、各部門の物流におけるCO2削減については、2011年まで「輸送効率を年あたり平均1%削減（2007年を基準として）」という目標を掲げています。省エネ効果とコスト効果の両立を図りながら削減効果の大きいものから実施することを基本とし、物流におけるCO2削減を統合的に進めるワーキンググループを設置して取り組みを進めています。

2009年は生産量の減少にともない、物流段階でのCO2排出量も前年比較で3割減少しましたが、輸送効率の面では0.0558から0.0606と悪化しています。物流方法の見直し、関係部門の活動内容の共有化などの施策を今後も継続して行っています。

ヤマハ発動機の物流CO2排出量



ヤマハ発動機の輸送効率



※1tのものを1km運ぶために必要な燃料エネルギーを原油換算した原単位

製品におけるCO2排出量削減

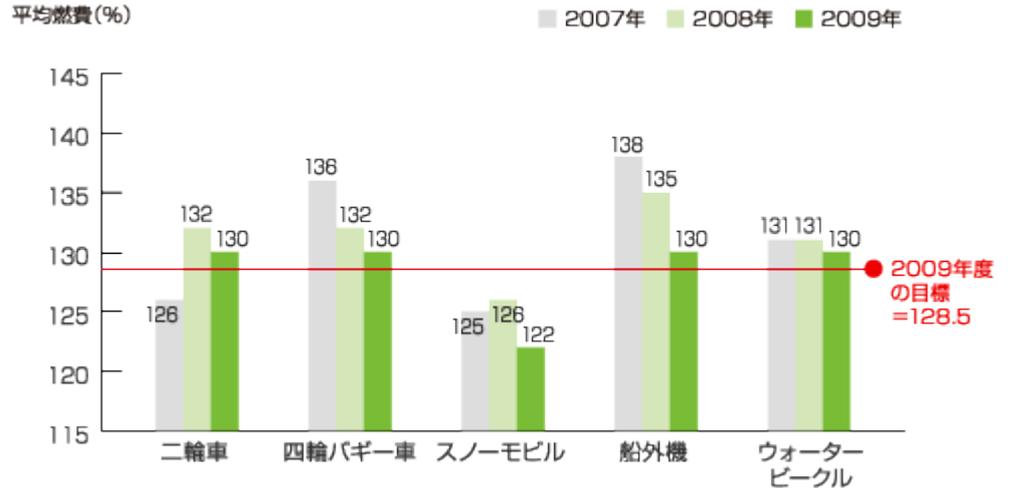
ヤマハ発動機グループが製造する製品には、開発、生産、使用、廃棄のなかでも使用段階におけるCO2排出が特に大きいという特徴があります。製品のライフサイクル全体での負荷を総合的に考え、使用中のCO2の削減にも積極的に取り組んでいます。

内燃機関の燃費向上

内燃機関による製品の使用時におけるCO2削減策としては、2010年までに全対象製品で30%の削減を目標に掲げています。目標を28.5%とした2009年の実績としては、スノーモビルなどのレクリエーション・ビークル事業については欧米での急激な市場変化による販売モデル構成の変化の影響が続いており未達成となりましたが、他の事業部製品についてはほぼ達成できています。

2010年2月発表の新中期経営計画（2010年～2012年）では、二輪車の燃費を2012年までに30%、2015年には50%の燃費向上（ともに2008年比）、船外機については2015年までに30%の燃費向上（2007年比）を目標として掲げており、今後も引き続き燃費向上によるCO2削減に取り組んでいきます。

主要製品別平均燃費の推移



※二輪車・四輪バギー車・スノーモビルは1995年、船外機・ウォータービークルは1998年を基準年としています。

新動力源「スマートパワー」による乗り物の開発

ヤマハ発動機では、2010年夏の市販に向けて電動二輪車の開発を進めています。走行中にCO2を排出しない乗り物への期待は日増しに高まっており、中長期での本格的な普及を目指して技術開発や事業基盤の構築に取り組んでいます。また、エコマインドや健康志向の定着により、企業による業務使用も含め電動アシスト自転車の普及が急速に進んでおり、2009年は前年12月に実施された道路交通法施行規則改正に対応したニューモデル14機種を導入をおこないました。将来的に新動力源となる可能性をもつ圧縮水素型燃料電池、直接メタノール型燃料電池の技術研究にも引き続き取り組んでおり、今後も持続可能な社会の実現をめざした多角的な製品・技術開発を継続していきます。

- ▶ 地球環境とともに
- ▶ 2009年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 パーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

環境負荷物質削減の取り組み

環境負荷物質削減のための取り組みをご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2009年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP小型船舶リサイクルシステム

関連リンク:

- ▶ [バイク・スクーター車種別環境情報](#)
- ▶ [FRPプールエコリニューアル](#)
- ▶ [バイオマスプラスチック製梱包材について](#)

地球環境

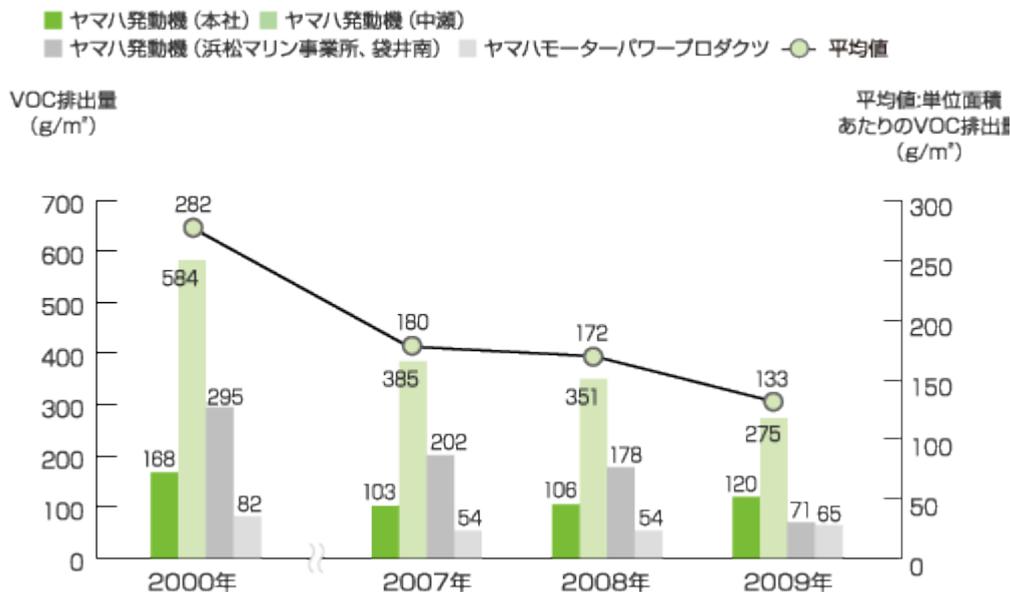
環境負荷物質削減の取り組み

PRTR制度報告対象物質の削減

ヤマハ発動機グループでは、人体や環境にとって有害となる化学物質の、排出物や廃棄物などへの含有量について、各国の規制に準じて把握・報告を行っています。また、ヤマハ発動機が排出するPRTR制度報告対象物質の99%以上はVOCとなっており、そのほとんどは塗装工程に関わるものです。

2009年には袋井南工場の新規設備稼働、廃塗料の溶剤分回収等の対策効果により原単位133g/m²（グループ平均）、53%の削減となっており、2010年に向けた目標である原単位50%削減（2000年比）も達成することができました。また、2009年のPRTR報告が必要となる事業所は13事業所となっています。ヤマハ発動機グループでは今後も低VOC塗料の採用拡大、塗着効率の改善、廃塗料の削減を推進していきます。

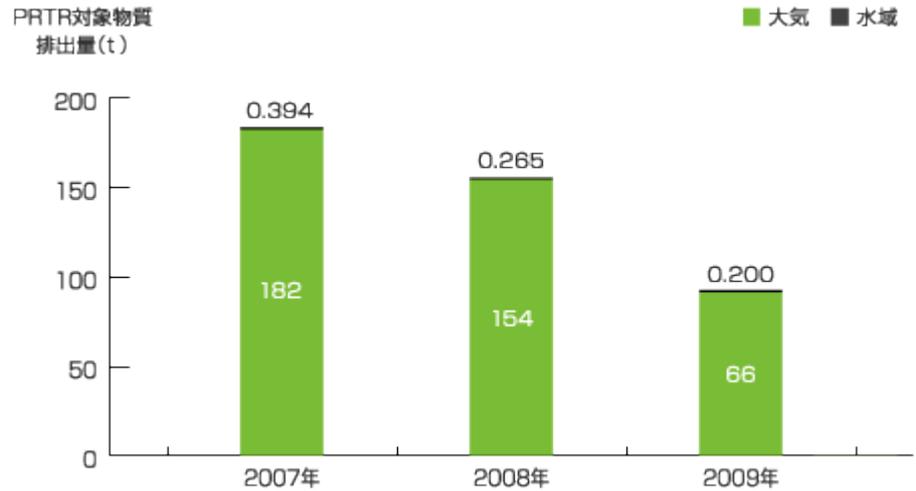
VOC排出量の推移



※PRTR：Pollutant Release and Transfer Register（環境汚染物質排出・移動登録）

※VOC：Volatile Organic Compounds（揮発性有機化合物）

ヤマハ発動機のPRTR対象物質排出量の推移



※2009年については、自治体への報告期間にあわせて2009年4月～2010年3月で集計した数値です（過去2年間の数値は、ともに1月～12月で集計）

REACH規制対応

欧州での化学物質の登録・評価・認可および制限に関する規則(REACH)が2007年6月に制定されたことを受け、ヤマハ発動機グループでは化学物質の管理を強化しています。2008年12月までの予備登録期間中に対象となる物質の予備登録を完了しており、2009年には2011年の届出に向けてグループ会社への管理システムの導入を進めました。今後もサプライチェーン全体での情報共有を図るとともに、化学物質の管理強化に努めていきます。

- ▶ 地球環境とともに
- ▶ 2009年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

資源循環や使用量削減の取り組み

リサイクルや資源の使用量を抑制するための取り組みをご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2009年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP小型船舶リサイクルシステム

関連リンク:

- ▶ バイク・スクーター車種別環境情報
- ▶ FRPプールエコリニューアル
- ▶ バイオマスプラスチック製梱包材について

地球環境

資源循環や使用量削減の取り組み

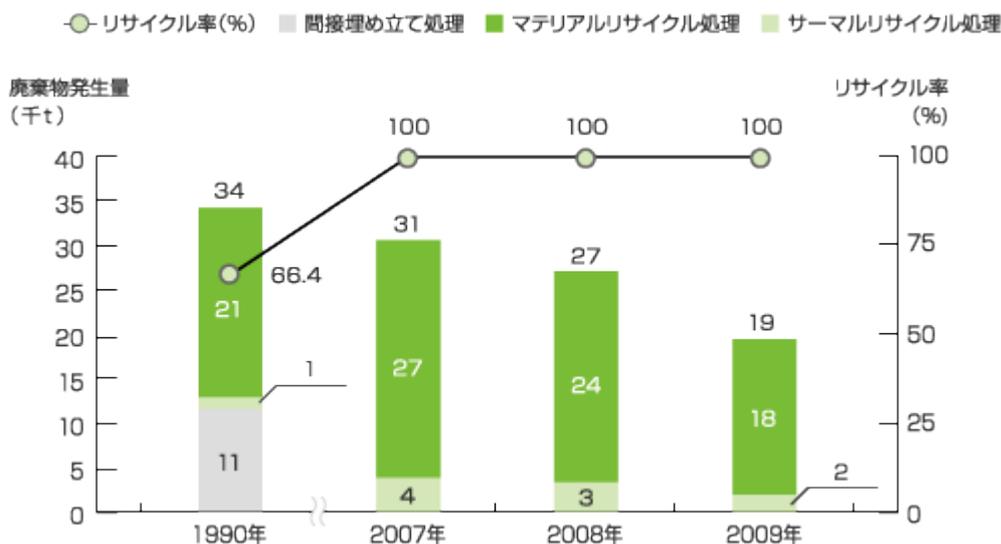
循環型社会の実現に向け、製品の開発、生産、使用、廃棄の各段階で「3R（リデュース、リユース、リサイクル）」の重要度は、さらに高まっています。ヤマハ発動機グループでは「製品・工場：リサイクル100%」「ロングライフの達成」を2010年目標として掲げ、さまざまな取り組みを行っています。また、軽量化として最も効果が期待できる小型化をはじめ、マグネシウムやアルミニウム、樹脂部品の拡大や一体化による部品点数の削減、最適形状の追求による薄肉化など様々なアプローチを進めています。さらに、部品リサイクル性などのデータ集計システムの運用を高め、製品3R向上に取り組んでいきます。

製造段階における廃棄物削減と資源保護の取り組み

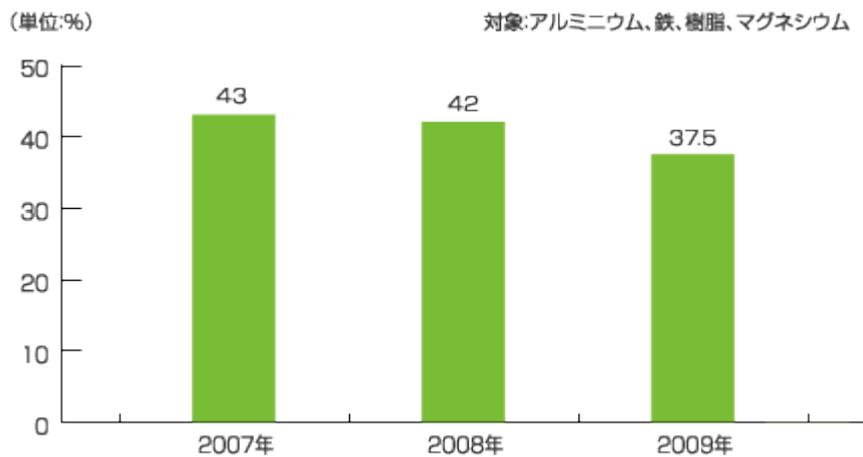
2009年度のヤマハ発動機（旧ヤマハマリンを含む）の産業廃棄物排出量は19,434 tとなっています。また、2007年を基準に年平均1%（2010年に3%）の削減を目標にしている排出物の売上原単位については26.6%の増加※となりました。廃棄物については、マテリアルリサイクル処理と、社内の廃棄物焼却処理施設（ACEP）によるサーマルリサイクルにより適正処理され、廃棄物の間接埋立量については「0トン」を継続して達成しています（リサイクル率100%）。また、2007年から取り組みを進めていた副産物（金属くず、廃砂）の削減については、6,418tの削減（2008年比マイナス30%）となっています。

※2009年は売上減少による原単位の増加がありましたが、排出総量は大幅に減少しています。

ヤマハ発動機の製造段階における廃棄物発生量・リサイクル率の推移



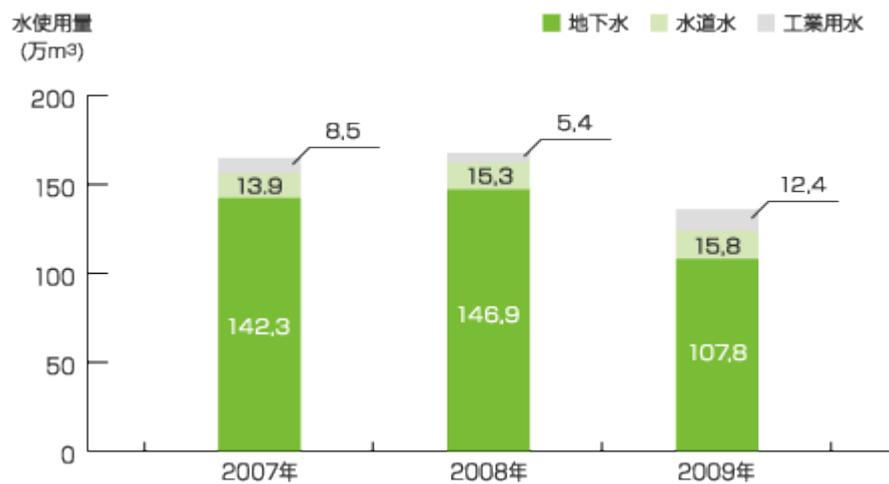
ヤマハ発動機の購入材料における再生材割合



水資源の保護

ヤマハ発動機グループでは、グループ共通の課題として水資源の保護に取り組んでおり、水使用の実態調査に関する運用面での仕組み改善をグローバルに進めています。

ヤマハ発動機の水使用量の推移



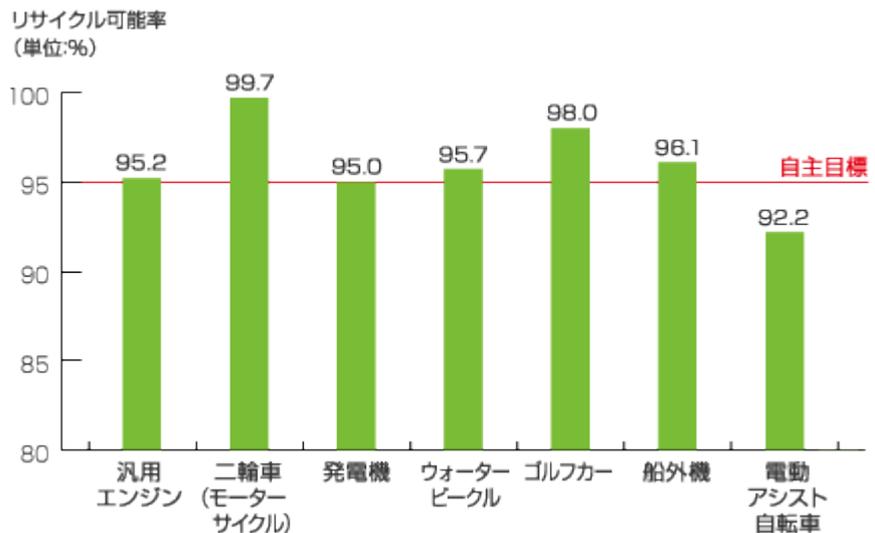
製品における3Rの事例（2009年発売モデル）



製品リサイクルと軽量化の推進

ヤマハ発動機グループでは、各種製品のリサイクル性向上に積極的に取り組んでいます。2009年には、日本国内で廃棄二輪車の取扱店が適正に処理を行う「二輪車リサイクルシステム」の推進を行いました。また、リユース、リデュース、リサイクル（3R）を考慮した製品設計にも引き続き取り組みました。

2009年度の製品別リサイクル可能率



二輪車リサイクルの取り組みの詳細についてはこちら

<http://www.yamaha-motor.co.jp/profile/csr/environmental-field/mc-recycle/>

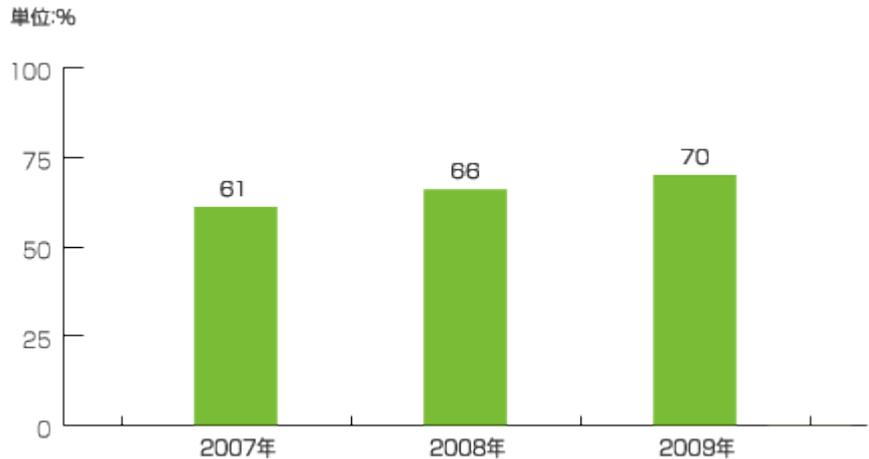
FRP船リサイクルシステムの取り組みの詳細についてはこちら

<http://www.yamaha-motor.co.jp/profile/csr/environmental-field/frp-recycle/>

補修部品の物流における3Rの取り組み

輸送用コンテナにおいて、抱き合わせ梱包化（充填率の向上によるリデュース）、中南米センターの稼働によるリターナブルパレット採用地域の拡大（リターナブル率向上におけるリユース）、事業所より排出される樹脂を再利用したリターナブルパレットの製作（事務所内廃材のリサイクル）など、部品物流における資源循環・省資源化に努めています。ヤマハ発動機の輸出用コンテナのリターナブル率については、前年度の66.4%に対し、2009年は69.9%まで改善されています。

ヤマハ発動機の部品梱包容器の海外出荷リターナブル率



バイオマスプラスチック製梱包材についてはこちら
<http://www.yamaha-motor.co.jp/biomass/>

- ▶ 地球環境とともに
- ▶ 2009年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

生物多様性保全の取り組み

事業活動における生物多様性の保全への取り組みをご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2009年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP小型船舶リサイクルシステム
- 関連リンク:
- ▶ バイク・スクーター車種別環境情報
- ▶ FRPプールエコリニューアル
- ▶ バイオマスプラスチック製梱包材について

地球環境

生物多様性保全の取り組み

ヤマハ発動機では、静岡県菊川市で着工を予定しているテストコース建設用区域（489,101m²）およびその周辺において、四季を通じた1年間の環境評価を2008年に実施しました。2009年はその結果のまとめとともに、静岡県レッドデータブック掲載種（カテゴリー：絶滅危惧II類、準絶滅危惧）のうち確認された植物（6種）、哺乳類（1種）、鳥類（4種）、魚類（1種）などの保全計画となる「自然環境保全協定書」を作成し、2010年に静岡県県民部環境局自然保護室と取り交わす予定です。

また、造成期間中の周辺地域に対する大気汚染、騒音、振動、水質汚濁、土壌汚染の予測、および周辺の生態系などへの影響を評価し、工事においては極力低減する工夫を行う方針です。



環境評価で確認されたシラン：静岡県レッドデータブック掲載種（カテゴリー準絶滅危惧種）

- [▶ 地球環境とともに](#)
- [▶ 資源循環や使用量削減の取り組み](#)
- [▶ 2009年の計画と実績](#)
- [▶ 生物多様性保全の取り組み](#)
- [▶ 環境マネジメント](#)
- [▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション](#)
- [▶ CO2排出量削減の取り組み](#)
- [▶ グループや各工場の環境データ](#)
- [▶ 環境負荷物質削減の取り組み](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)

エコマインドの醸成と環境コミュニケーション

環境に対する意識向上や活動促進のための取り組みをご紹介します。

地球環境:

- ▶ 2009年の計画と実績
- ▶ 環境マネジメント
- ▶ CO2排出量削減の取り組み
- ▶ 環境負荷物質削減の取り組み
- ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み
- ▶ 生物多様性保全の取り組み
- ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション
- ▶ グループや各工場の環境データ
- ▶ グリーン調達ガイドライン
- ▶ 二輪車「3R」設計について
- ▶ 二輪車リサイクルシステム
- ▶ FRP小型船舶リサイクルシステム

関連リンク:

- ▶ [バイク・スクーター車種別環境情報](#)
- ▶ [FRPプールエコリニューアル](#)
- ▶ [バイオマスプラスチック製梱包材について](#)

地球環境

エコマインドの醸成と環境コミュニケーション

ヤマハ発動機グループは、地球環境との共存を図るうえでは、製品・サービスの提供という事業活動において環境保全活動を推進することはもちろん、ステークホルダーの皆さまの理解・参加を得ながら連携を深めていくことも重要であると考えています。また、環境保全活動への取り組みについて説明責任を果たすことも企業の社会的責任の一つであると考えています。

これらの認識のもとに、「ヤマハ発動機グループ環境計画2010」において、「企業市民として地域から信頼され、敬愛を受ける」ことを目標として掲げており、外部からの要請を受けて、環境関連の当社の取り組み（エコ通勤やビーチクリーン&子ガメの放流会）についての講演や、CSRレポートなどを通じた情報発信を行うことで、ステークホルダーの皆さまとのコミュニケーションを深めています。

また、2004年から実施しているエコ通勤活動については、継続的な取り組みが評価され、国土交通省が制定するエコ通勤優良事業所認証制度の初年度に9事業所が登録されました。



エコ通勤活動についての社外での講演



エコ通勤優良事業所認証制度の登録証

エコポイント制度の導入

「ヤマハ発動機グループ環境計画2010」では、「グループ全員が高い目標意識で環境取り組みを積極的に行っている」ことを目標に掲げています。その支援策として、ヤマハ発動機は2008年1月にエコポイント制度を導入しました。この制度は、エコ活動をポイント化する指標を設定し、年間ポイントの獲得と活動項目数に応じて、エコ賞品が選べる仕組みになっています。

- | | |
|---------------------------------|---|
| ▶ 地球環境とともに | ▶ 資源循環や使用量削減の取り組み |
| ▶ 2009年の計画と実績 | ▶ 生物多様性保全の取り組み |
| ▶ 環境マネジメント | ▶ エコマインドの醸成と環境コミュニケーション |
| ▶ CO2排出量削減の取り組み | ▶ グループや各工場の環境データ |
| ▶ 環境負荷物質削減の取り組み | |

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

[▲ このページの先頭へ](#)

CSR情報の開示について

CSRレポート2010に記載した情報の編集方針や対象となる期間などについてご説明します。

CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク：

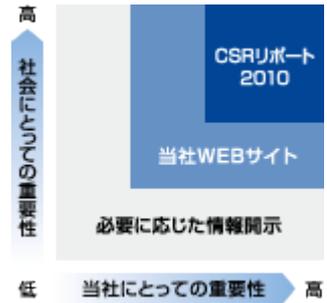
- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

CSR情報の開示について

ヤマハ発動機は、グループのCSR（Corporate Social Responsibility：企業の社会的責任）の考え方や取り組みをまとめた「CSRレポート」の発行を通じて、ステークホルダーの皆さまとのコミュニケーションを深めるとともに、社会にご報告する情報や内容の充実を図ってきました。

「CSRレポート2010」の作成にあたっては、ヤマハ発動機グループのCSRに関するさまざまな取り組みを、「社会にとっての重要性」「当社にとつ

ての重要性」の観点から整理するとともに、ステークホルダーの皆さまの閲覧のしやすさや環境負荷の低減などを考慮して、冊子（紙媒体）を廃止、WEBサイトに1本化しています。また、主な事例の報告を中心に「CSRレポート2010」の概要をご覧いただけるダイジェスト版（PDF）も作成しました。



■参考にしたガイドライン： CSRレポート2010の作成にあたっては、グローバル・リポーティング・イニシアティブ（GRI）の「サステナビリティ・リポーティング・ガイドライン第3版（G3）」、環境省の「環境報告ガイドライン2007年版」等を参考にしています。

■対象範囲： ヤマハ発動機株式会社および連結対象会社（一部、関係会社を含む）からなるヤマハ発動機グループを対象としています。異なる場合には対象範囲を明記しています。

■記事中の社名表記： ヤマハ発動機株式会社についてはヤマハ発動機（一部のグラフ等では略称のYMCを使用）、連結子会社（一部、関係会社も含む）のうち、国内については日本語表記の社名、海外については英語表記の社名の略称としています。

■対象期間： 2009年1月～2009年12月（一部、前後の期間についての報告含む）

■前回レポート発行： 2009年6月

■次回レポート発行： 2011年6月頃

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)



[ホーム](#) > [企業情報・CSR情報](#) > [CSR（企業の社会的責任）](#) > [GRIガイドライン対照表](#)

GRIガイドライン対照表

CSRレポート2010で開示している情報のGRIガイドラインとの対照表です。

CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ [トップメッセージ](#)
 - ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
 - ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
 - ▶ [CSRの考え方](#)
 - ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
 - ▶ [お客さま](#)
 - ▶ [株主・投資家](#)
 - ▶ [従業員](#)
 - ▶ [取引先](#)
 - ▶ [地域社会](#)
 - ▶ [地球環境](#)
 - ▶ [CSR情報の開示について](#)
 - ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
 - ▶ [発行物ダウンロード](#)
- 関連リンク：
- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

GRIガイドライン対照表

項目	指標	WEB ページ
1. 戦略および分析		
1.1	組織にとっての持続可能性の適合性とその戦略に関する組織の最高意思決定者（CEO、会長またはそれに相当する上級幹部）の声明	トップメッセージ
1.2	主要な影響、リスクおよび機会の説明	CSRの考え方

項目	指標	WEB ページ
2. 組織のプロフィール		
2.1	組織の名称	（企業概要）
2.2	主要なブランド、製品および／またはサービス	（企業概要）
2.3	主要部署、事業会社、子会社および共同事業などの、組織の経営構造	（企業概要）
2.4	組織の本社の所在地	（企業概要）
2.5	組織が事業展開している国の数および大規模な事業展開を行っている、あるいは報告書中に掲載されているサステナビリティの課題に特に関連のある国名	（グループ企業）
2.6	所有形態の性質および法的形式	（企業概要）
2.7	参入市場（地理的内訳、参入セクター、顧客／受益者の種類を含む）	（企業概要）
2.8	以下の項目を含む報告組織の規模 <ul style="list-style-type: none"> • 従業員数 • 純売上高（民間組織について）あるいは純収入（公的組織について） • 負債および株主資本に区分した総資本（民間組織について） • 提供する製品またはサービスの量 	（企業概要）
2.9	以下の項目を含む、規模、構造または所有形態に関して報告期間中に生じた大幅な変更 <ul style="list-style-type: none"> • 施設のオープン、閉鎖および拡張などを含む所在地または運営の変更 • 株式資本構造およびその資本形成における維持および変更業務（民間組織の場合） 	（沿革）

項目	指標	WEB ページ
3. 報告要素		
3.1	提供する情報の報告期間（会計年度／暦年など）	CSR情報の開示について
3.2	前回の報告書発行日（該当する場合）	CSR情報の開示について
3.3	報告サイクル（年次、隔年など）	CSR情報の開示について

3.4	報告書またはその内容に関する質問の窓口	(お問い合わせ)
3.5	以下の内容を含め、報告書の内容を確定するためのプロセス <ul style="list-style-type: none"> 重要性の判断 報告書内のテーマの優先付け 組織が報告書の利用を期待するステークホルダーの特定 	CSR情報の開示について
3.6	報告書のバウンダリー（国、部署、子会社、リース施設、共同事業、サプライヤーなど） ※詳細はGRIバウンダリー・プロトコルを参照のこと	CSR情報の開示について
3.7	報告書のスコープまたはバウンダリーに関する具体的な制限事項	CSR情報の開示について
3.8	共同事業、子会社、リース施設、アウトソーシングしている業務および時系列での、および／または報告組織間の比較可能性に大幅な影響を与える可能性があるその他の事業体に関する報告の説明	(企業概要)
3.9	報告書内の指標およびその他の情報を編集するために適用された推計の基となる前提条件および技法を含む、データ測定技法および計算の基盤	地球環境とともに
3.10	以前の報告書で掲載済みである情報を再度記載することの効果の説明、およびそのような再記述を行う理由（合併／買収、基本となる年／期間、事業の性質、測定方法の変更など）	該当なし
3.11	報告書に適用されているスコープ、バウンダリーまたは測定方法における前回の報告期間からの大幅な変更	該当なし
3.12	報告書内の標準開示の所在場所を示す表 以下の項目を検索できるように、ページ番号またはWEBリンクを明らかにする。 <ul style="list-style-type: none"> 戦略および分析 1.1～1.2 組織のプロフィール 2.1～2.10 報告要素 3.1～3.13 ガバナンス、コミットメントおよび参画 4.1～4.17 カテゴリーごとのマネジメント・アプローチの開示 中核パフォーマンス指標 盛り込まれているGRIの追加指標 報告書に盛り込まれているGRIの業種別補足文書の指標 	本表

項目	指標	WEBページ
4. ガバナンス、コミットメント、および参画		
4.1	戦略の設定または全組織的監督など、特別な業務を担当する最高統治機関の下にある委員会を含む統治構造（ガバナンスの構造）	(コーポレート・ガバナンス)
4.2	最高統治機関の長が執行役員を兼ねているかどうかを示す（兼ねている場合は、組織の経営におけるその役割と、このような人事になっている理由も示す）	(コーポレート・ガバナンス)
4.3	単一の理事会構造を有する組織の場合は、最高統治機関における社外メンバーおよび／または非執行メンバーの人数を明記	(コーポレート・ガバナンス)
4.4	株主および従業員が最高統治機関に対して提案または指示を提供するためのメカニズム 以下のプロセスへの参照を盛り込む <ul style="list-style-type: none"> 少数株主が最高統治機関に意見を表明するための株主決議またはその他のメカニズムの利用 組織レベルの「労使協議会」などの正式な代表組織および最高統治機関内の従業員代表との、職務上の関係についての従業員への通知および協議 	(コーポレート・ガバナンス)
4.5	最高統治機関メンバー、上級管理職および執行役についての報酬（退任の取り決めを含む）と組織のパフォーマンス（社会的および環境的パフォーマンスを含む）との関係	(コーポレート・ガバナンス)
	最高統治機関が利害相反問題の回避を確保するために実施されて	(コーポレート・ガバナンス)

4.6	いるプロセス	ス)
4.7	経済、環境および社会的パフォーマンスに関連する課題を含め、組織の戦略を導くために、最高統治機関のメンバーに求められる適性および専門性を決定するためのプロセス	(コーポレート・ガバナンス)
4.8	経済的、環境的、社会的パフォーマンス、さらにその実践状況に関して、組織内で開発したミッション（使命）およびバリュー（価値）についての声明、行動規範および原則 以下の項目についての程度を説明する ・ 組織全体を通じて、異なる地域および部署／ユニットでどの程度適用されているか ・ 国際的に合意された基準にどの程度関連しているか	CSRの考え方
4.9	組織が経済的、環境的、社会的パフォーマンスを特定し、マネジメントしていることを最高統治機関が監督するためのプロセス。関連のあるリスクと機会を特定かつマネジメントしていること、さらに国際的に合意された基準、行動規範および原則への支持または遵守を含む	CSRの考え方
4.10	最高統治機関のパフォーマンスを、特に経済的、環境的、社会的パフォーマンスという観点で評価するためのプロセス	CSRの考え方
4.11	組織が予防的アプローチまたは原則に取り組んでいるかどうか、およびその方法はどのようなものかについての説明	CSRの考え方
4.12	外部で開発された、経済的、環境的、社会的憲章、原則あるいは組織が同意または受諾するその他のイニシアティブ	取引先とともに
4.14	組織に参画したステークホルダー・グループのリスト	ステークホルダーへの取り組み姿勢
4.15	参画してもらうステークホルダーの特定および選定の基準	ステークホルダーへの取り組み姿勢
4.16	種類ごとの、およびステークホルダー・グループごとの参画の頻度など、ステークホルダー参画へのアプローチ	ステークホルダーへの取り組み姿勢
4.17	ステークホルダー参画を通じて浮かび上がった主要な課題および懸案事項と、それらに対して組織がどのように対応したか	製品開発とモノ創り

項目	指標	WEBページ
5. マネジメント・アプローチに関する開示とパフォーマンス指標		
【経済】		
マネジメント・アプローチ		
	目標とパフォーマンス	(IR資料)
	方針	(IR資料)
パフォーマンス指標		
EC6	主要事業拠点での地元のサプライヤーについての方針、業務慣行および支出の割合	グリーン調達/サプライヤーとのパートナーシップ
EC8	商業活動、現物支給、または無料奉仕を通じて主に公共の利益のために提供されるインフラ投資およびサービスの展開図と影響	地域社会とともに
【環境】		
マネジメント・アプローチ		
	目標とパフォーマンス	2009年の計画と実績
	方針	地球環境とともに
	組織の責任	地球環境とともに
	研修及び意識向上	環境マネジメント
	監視及びフォローアップ	環境マネジメント
パフォーマンス指標		
EN1	使用原材料の重量または容積	環境マネジメント

EN2	リサイクル由来の使用原材料の割合	環境マネジメント
EN3	1次エネルギー源ごとの直接的エネルギー消費量	環境マネジメント
EN4	1次エネルギー源ごとの間接的エネルギー消費量	環境マネジメント
EN8	水源からの総取水量	環境マネジメント
EN11	保護地域内、あるいはそれに隣接した場所および保護地域外で生物多様性の価値が高い地域に所有、賃借、あるいは管理している土地の所在地および面積	生物多様性保存の取り組み
EN12	保護地域および保護地域外で生物多様性の価値が高い地域での生物多様性に対する活動、製品およびサービスの著しい影響の説明	生物多様性保存の取り組み
EN16	重量で表記する、直接および間接的な温室効果ガスの総排出量	CO2排出量削減の取り組み
EN17	重量で表記する、その他の関連ある間接的な温室効果ガス排出量	CO2排出量削減の取り組み
EN18	温室効果ガス削減のための取り組みと削減実績	CO2排出量削減の取り組み
EN19	重量で表記する、オゾン層破壊物質の排出量	該当なし
EN20	種類別および重量で表記するNOx、SOxおよびその他の著しい影響を及ぼす排気物質	グループや各工場の環境データ
EN21	水質および放出先ごとの総排水量	グループや各工場の環境データ
EN22	種類および廃棄方法ごとの廃棄物の総重量	グループや各工場の環境データ
EN26	製品およびサービスの環境影響を緩和する率先取組と、影響削減の程度	CO2排出量削減の取り組み
EN27	カテゴリ別の、再生利用される販売製品およびその梱包材の割合	資源循環や使用量削減の取り組み
EN28	環境規制への違反に対する相当な罰金の金額および罰金以外の制裁措置の件数	グループや各工場の環境データ
【労働慣行と公正な労働条件】		
マネジメント・アプローチ		
目標とパフォーマンス		ステークホルダーへの取り組み姿勢
方針		従業員とともに
組織の責任		従業員とともに
研修及び意識向上		人材育成/キャリア支援 職場の安全衛生
監視及びフォローアップ		職場の安全衛生
パフォーマンス指標		
LA1	雇用の種類、雇用契約および地域別の総労働力	(企業概要)
LA10	従業員のカテゴリ別の、従業員あたり年間平均研修時間	人材育成/キャリア支援
【人権】		
マネジメント・アプローチ		
目標とパフォーマンス		ステークホルダーへの取り組み姿勢
方針		多様性を活かした職場づくり
組織の責任		従業員とともに
研修及び意識向上		多様性を活かした職場づくり
監視及びフォローアップ		多様性を活かした職場づくり
【社会】		
マネジメント・アプローチ		
目標とパフォーマンス		ステークホルダーへの取り組み姿勢

方針		リスクマネジメント/コンプライアンス
組織の責任		リスクマネジメント/コンプライアンス
研修及び意識向上		リスクマネジメント/コンプライアンス
監視及びフォローアップ		リスクマネジメント/コンプライアンス
パフォーマンス指標		
SO2	不正行為に関するリスクの分析を行った事業単位の割合と総数	リスクマネジメント/コンプライアンス
SO3	組織の不正行為対策の方針および手順に関する研修を受けた従業員の割合	リスクマネジメント/コンプライアンス
SO4	不正行為事例に対して取られた措置	リスクマネジメント/コンプライアンス
【製品責任】		
マネジメント・アプローチ		
目標とパフォーマンス		ステークホルダーへの取り組み姿勢
方針		お客さまとともに
組織の責任		お客さまとともに
研修及び意識向上		製品開発とモノ創り お客さま対応/サービス 安全運転普及活動
監視及びフォローアップ		お客さま対応/サービス

CSRトップページ | CSRの考え方 | コーポレート・ガバナンス
 お客さま | 株主・投資家 | 従業員 | 取引先 | 地域社会 | 地球環境

バイク・スクーター 電動バイク 電動自転車 マリン製品 製品一覧 企業情報・CSR情報
 レース情報 ラグビー情報 ペーパークラフト グループリンク 部品情報検索 リコール情報 ニュースリリース

ご利用規約 | 推奨環境・プラグイン | プライバシーポリシー | サイトマップ | お問い合わせ

▲ このページの先頭へ

[ホーム](#) > [企業情報・CSR情報](#) > [CSR（企業の社会的責任）](#) > [発行物ダウンロード](#)

発行物ダウンロード

最新のCSR レポートや過去の発行物のPDFはこちらでダウンロードできます。

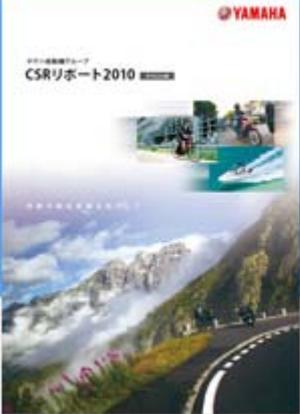
CSR（企業の社会的責任）：

- ▶ [トップメッセージ](#)
- ▶ [CSR関連のお知らせ](#)
- ▶ [2009年活動クローズアップ](#)
- ▶ [CSRの考え方](#)
- ▶ [コーポレート・ガバナンス](#)
- ▶ [お客さま](#)
- ▶ [株主・投資家](#)
- ▶ [従業員](#)
- ▶ [取引先](#)
- ▶ [地域社会](#)
- ▶ [地球環境](#)
- ▶ [CSR情報の開示について](#)
- ▶ [GRIガイドライン対照表](#)
- ▶ [発行物ダウンロード](#)

関連リンク：

- ▶ [CSRレポート2010についてのアンケート](#)

発行物ダウンロード



CSRレポート2010 (2010年6月発行)
ダイジェスト版

▶ [ダウンロード](#) PDF: 2.4MB

過去の発行物

CSRレポート

- ▶ [CSRレポート2009 PDF:7.1MB](#)
- ▶ [CSRレポート2008 PDF:2.4MB](#)
- ▶ [CSRレポート2007 PDF:2.5MB](#)
- ▶ [CSRレポート2006 PDF:2.6MB](#)
- ▶ [CSRレポート2005 PDF:2.05MB](#)

CSRレポート資料編

- ▶ [CSRレポート2008 資料編 PDF:2.8MB](#)
- ▶ [CSRレポート2007 資料編 PDF:936KB](#)
- ▶ [CSRレポート2006 資料編 PDF:680KB](#)
- ▶ [CSRレポート2005 資料編 PDF:1.05KB](#)

※CSRレポート2009以降の資料編についてはウェブページに掲載しています。

環境報告書

- ▶ [環境報告書2004 PDF:2.22MB](#)
- ▶ [環境報告書2003 PDF:6.76MB](#)
- ▶ [環境報告書2002 PDF:1.1MB](#)
- ▶ [環境報告書2001 PDF:1.16MB](#)
- ▶ [環境報告書2000 PDF:1.77MB](#)

[CSRトップページ](#) | [CSRの考え方](#) | [コーポレート・ガバナンス](#)
[お客さま](#) | [株主・投資家](#) | [従業員](#) | [取引先](#) | [地域社会](#) | [地球環境](#)